

周船寺遺跡群 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第692集

2001

福岡市教育委員会

「周船寺遺跡群4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第692集 正誤表(1)

頁 行 誤

序文 14 平成12年

Fig.1 地図中央の「周船寺」の文字の下の●に番号「3」が抜けている

5 3 その跡に その後に

11 34 西側の遺構群を調査後 西側の弥生時代の遺構群を調査後、

23 9 (石綿状) (海綿状)

25 27 SK109 SK109 (Fig.4)

27 11 SD133 SD151

31 1 壺、壺の 壺、333は壺の

31 16 (Fig.26) (Fig.4)

31 18 SK137 SK137 (Fig.4)

33 3 伴うものではと 伴うもではないかと

33 27 337 437

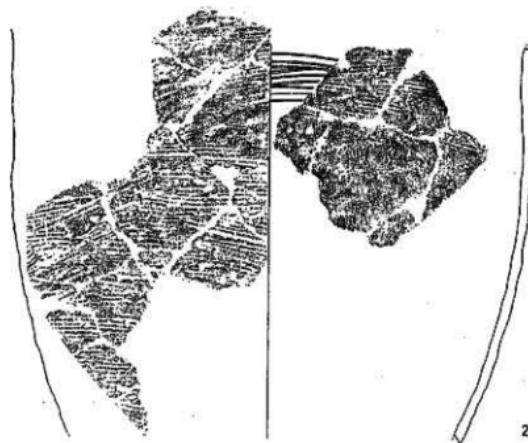
正

序文 14 平成13年

SC028の中央土坑から黒曜石製の石鎌2点が出土している。

6頁Fig.7

ST014を再度検討し、2については下図の方がより元に近いと考える。1の径はこれにあつたものになろう。



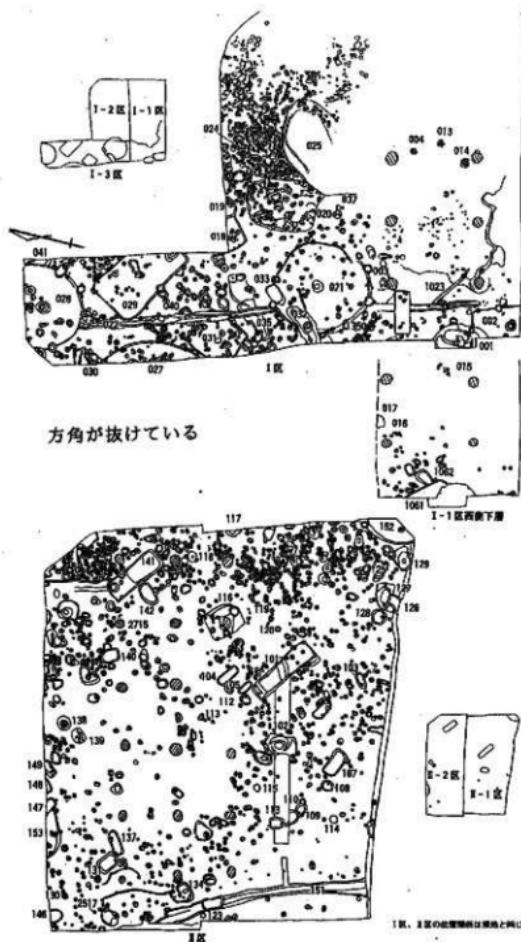


Fig. 4 連續配置圖(1/200)

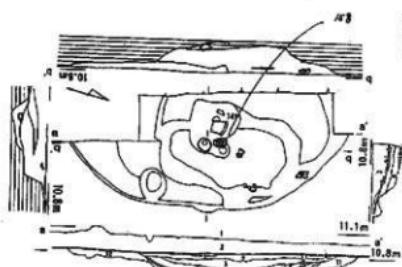


Fig. 18. T區土壤剖面圖 1 (1/10)

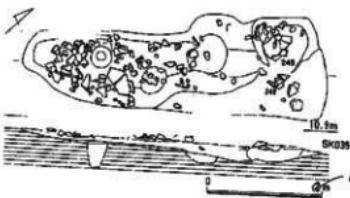
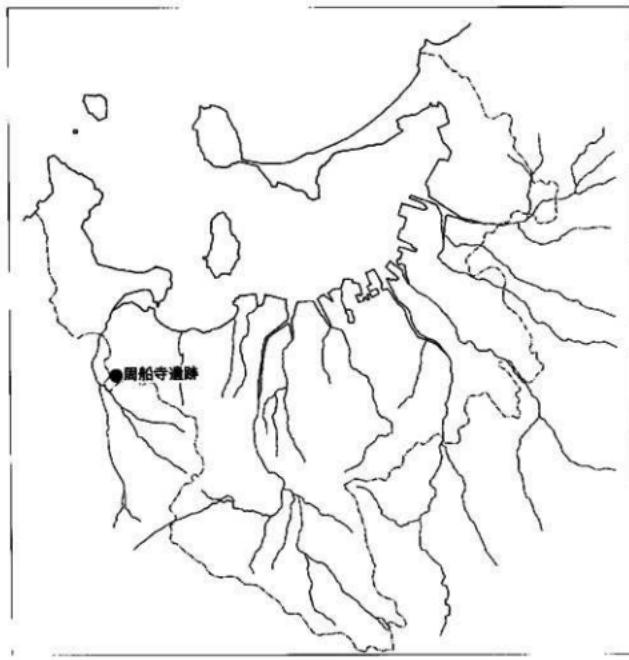


Fig.22 SK035窝刺图 (1/30)

SU SEN JI
周船寺遺跡群 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第692集



周船寺遺跡13次 調査番号 9956
遺跡番号 SSJ-13

2001

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成11年度に実施した、西区千里住宅建て替えに伴う周船寺遺跡13次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心から感謝の意を表します。

平成12年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

1. 本章は市営千早住宅建替に伴い平成11年11月15日から同12年3月10日に発掘調査を実施した周船寺遺跡第13次調査の報告である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21'西偏する。
3. 遺物実測図のトーンは、断りがない限り赤色顔料塗布が観察できた範囲を意味する。
4. 本書に使用した遺構の実測は黛修一、吉村寛司、担当者が、遺物の実測は疊石器の一部を平川敬治、他を担当者が、挿図の製図は吉村敦子、担当者が、写真撮影は担当者が行った。
5. 本書の作成にあたり上田保子、前田みゆき、中原尚美、米倉いづみの協力を得た。
6. 放射性炭素の年代測定については株式会社古環境研究所に依頼し成果を掲載した。
7. 本章の執筆、図集は担当者が行った。
8. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

調査番号	9956	事前審査番号	10-1-111	遺跡略号	SSJ-13
調査地地籍	西区大字千里449-1、452-7、452-7			分布地図番号	千里132
開発面積	1600m ²			調査面積	949m ²
調査期間	1999年11月15日～2000年3月10日			担当者	池田祐司

本文目次

I.はじめに	1
1.調査に至る経緯	1
2.調査の組織	1
II.遺跡の立地とこれまでの調査	3
III.調査の記録	3
1.調査の概要	3
2.縄文時代の遺構とその出土遺物	4
(1) 坪臺	4
(2) 土坑その他	11
(3) 縄文土器包含層	11
3.弥生時代以降の遺構と出土遺物	12
(1) 住居跡	12
(2) 土坑	18
(3) 溝	31
(4) 耕作痕	32
(5) ピットと出土遺物	33
4.包含層出土遺物	33
5.出土石器	35
IV.おわりに	

挿図目次

Fig. 1	周辺の縄文晩期・弥生前期の遺跡他(1/50000)	
Fig. 2	周船寺遺跡調査地点 (1/4000)	
Fig. 3	調査区位置図(1/1000)	1
Fig. 4	遺構配図(1/200)	2
Fig. 5	土層略図 (1/60)	3
Fig. 6	縄文時代遺構実測図 (1/30、40)	5
Fig. 7	縄文時代遺構出土遺物実測図1 (1/4)	6
Fig. 8	縄文時代遺構出土遺物実測図2 (1/4)	7
Fig. 9	縄文時代遺構出土遺物実測図3 (1/4、3)	8
Fig. 10	縄文時代遺構出土遺物実測図4 (1/3、1/4)	9
Fig. 11	縄文時代遺構出土遺物実測図5 (1/3)	10
Fig. 12	SC021実測図 (1/60、20)	13
Fig. 13	SC021出土石器量 (1/120)	13
Fig. 14	SC021出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig. 15	SC002、027、028、029実測図 (1/60)	15
Fig. 16	SC031、152、153実測図 (1/60)	16
Fig. 17	SC002、027、028、029、031出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig. 18	I 区土坑実測図 1 (1/40)	19
Fig. 19	I 区土坑出土遺物実測図 1 (1/3、4)	20
Fig. 20	I 土坑出土遺物実測図 2 (1/3)	21
Fig. 21	SK032出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig. 22	SK035実測図 (1/30)	23
Fig. 23	SK035出土遺物実測図 1 (1/3、4)	24
Fig. 24	SK035出土遺物実測図 2 (1/3)	25
Fig. 25	II 区土坑実測図 1 (1/40)	26
Fig. 26	II 区土坑実測図 2 (1/40)	27
Fig. 27	II 区土坑出土遺物実測図 1 (1/3)	28
Fig. 28	II 区土坑出土遺物実測図 2 (1/3)	29
Fig. 29	II 区土坑出土遺物実測図 3 (1/3)	30
Fig. 30	I 区ピット出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig. 31	II 区ピット出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig. 32	II 区ピット出土遺物実測図 (1/3)	35
Fig. 33	I 区出土その他の遺物実測図 (1/3)	36
Fig. 34	I 区出土その他の遺物実測図 (1/3)	37
Fig. 35	II 区出土その他の遺物実測図 (1/3)	38
Fig. 36	出土石器実測図 1 (2/3)	39
Fig. 37	出土石器実測図 2 (2/3、1/2、1/3)	40
Fig. 38	出土石器実測図 3 (2/3、1/2)	41
Fig. 39	出土石器実測図 4 (1/3)	42
Fig. 40	出土石器実測図 5 (1/3、1/4)	43



Fig. 1 周辺の縄文晩期・弥生前期の遺跡・他(1/50000)



Fig. 2 周船寺遺跡調査地点 (1/4000)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成10年、福岡市土木局住環境整備部住宅計画課は西区大字千里452-3他地内の千里住宅の建替を計画し、当該地について埋蔵文化財の有無確認の依頼を教育委員会埋蔵文化財課に出した。

申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である削船寺遺跡地内にあたるが、既存の建物が建設された当時は文化財行政の体制が充分な機能を成していなかったため、試掘調査等は成されていなかった。このため埋蔵文化財課は平成11年8月18日に試掘調査を行い、弥生時代を中心とした遺構と遺物を確認した。以後住宅計画課と埋蔵文化財課の間で協議を行い、諸事情から本調査を避けられないとの結論に至り、平成11年11月15日から同12年3月10日まで発掘調査を実施した。

2. 調査の組織

事業主体 福岡市建設局住環境整備部住宅計画課

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 山崎純男

第1係長 山口誠治

調査担当 池田祐司

発掘作業 西田マキエ 森友ナカ 石田照江 木戸和子 真鍋キミエ 末松美佐子 小金丸ミネ子
黛ツギノ 木藤猛美 大童陽子 近藤ノリ子 掘田昭 友池富美子 鶴田善治 深見佳子
木戸アサノ 柴田種美 那賀久子 徳永忠子 山崎シズエ 柴田シズノ 徳重コマキ
中村シゲ子 三吉ヨシ子 蜂須賀博子 黒修一 吉村寛司

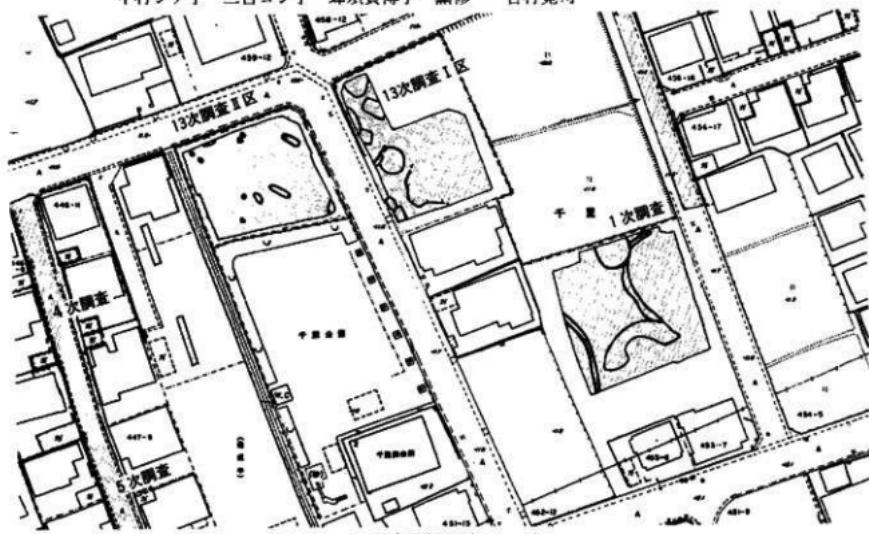


Fig. 3 調査区位置図 (1/1000)



Fig. 4 遺構配置図(1/200)

II. 遺跡の立地とこれまでの調査

背振山系西半の盟主的山塊である井原山、雷山に発する瓊杵寺川、雷山川が解説した糸島平野は、下流で沖積扇状地を形成し、周船寺遺跡はその先端近くに位置する。周辺の低地は水田地帯で、遺跡はその微高地に広がり、調査地点は遺跡の中央部である。

これまでの調査では縄文時代晩期の埋甕、弥生時代前期の甕棺、住居跡、中期の臺棺等が確認されており、市報654集で簡単にまとめられている。Fig. 2では、周船寺遺跡で確認された晩期を中心とする縄文期から弥生中期までの遺構、遺物を試掘調査を含めて不十分ながら示した。11次調査地点付近から北側では、礫層上面が複雑に上下し、その低い部分に暗青灰色、黄褐色シルトが堆積し、弥生時代の遺構面となる。また、暗青灰色シルトの上部には縄文時代の遺物が含まれる場合がある。全体に削平が著しいと考えられ、遺構の残りも悪い。縄文晩期の遺物が散布する範囲は広いが、埋甕は1、4、13地点に集中する。埋甕以外の遺構は検出し難く確認に至っていない。削平されたものが多いと考えられる。弥生前期は1、13次で住居が、8、6次で甕棺が確認され、1、13、8次地点で囲まれた範囲、10次、6次地点と小さな範囲の集落域が想定できそうである。7次調査地点は遺構が濃密度で確認されているが、周辺の試掘調査では低地で遺構、遺物を確認できていない。狭い微高地に集落を営む典型と考えられる。弥生中期は6次から11次とその西側の密度が濃い。遺構、遺物なしとした箇所も、基本的な層序は他の部分と同様である。未確認部分でも狭い範囲で集落、墓地等として選地され遺跡が残存している可能性がある。

II. 調査の記録

1. 調査の概要

客土、旧耕作土を除去した灰褐色、淡黃褐色粘質土上面で遺構を検出した。基本的な層位はFig. 5のとおりだが、9層の礫層が遺構検出面のレベルまであがる部分がある。調査地点は道路により2カ所に分かれており、東側をI区、西側をII区とした。また排土置き場の関係で工程上さらに3、2区に分けて調査を行い、便宜上細かな区として説明に使用する(Fig. 4)。I区では1-1区西側が淡黃褐色土上面でSK001等の弥生時代遺構を検出し、検出面が縄文土器包含層(005)となる。その下面でも遺構を検出し、配置図をFig. 4に「I-1区西側下層」として示した。東側は暗青灰色粘質土(4層)、黄灰褐色(2層)シルトが溜まり、縄文後期から弥生時代中期初頭の遺物包含層である。その下部から埋甕や、晩期の土器がまとまって出土し、原位置を保っているものがある。Fig. 5の004等の掘り込み面は不明である。I-2、3区は暗青灰色粘質シルトが広がり、SX025等一部に礫層があがってきている。削平が大きいと考えられる。II区は床土を除去した暗青灰色粘質シルト上面で遺物を検出し遺構検出を行ったが、さらに5から8cm下げた上部よりやや淡い青灰褐色粘質シルト上面で弥生時代の遺構を検出した。ただし、埋甕は当初遺構検出を行ったレベルで出土しており、搅乱、汚染によって遺物が攪拌されたものと考えられる。検出面より下位ではほとんど遺物は出土しなかった。II区では北側半分の大部分が礫層となり、南側ほど礫層の上面レベルは下がる。Fig. 5の7層以



Fig. 5 土層略図 (1/60)

下のレベルはⅡ区南側のものである。こここの10層で出土した生木で放射性炭素年代測定を行った結果、B.P.4200±70という年代値を得た。周船寺遺跡が立地する沖積扇状地の形成と遺跡立地を考える上で考慮すべき値であろう。

検出した遺構は縄文時代の埋甕8基、弥生時代の前期の住居跡としたもの7基、土坑、ピット等である。住居跡S C 021の床面には玄武岩のチップが広がり石器製作の痕跡と考えられる。この他床近くに炭を多く含む土坑等がある。また、水洗により微量ではあるが骨片を検出した。

遺物は遺構に伴い固化できるものはできるだけ掲載した。また、縄文土器は遺構出土以外のものも図化に努め、弥生時代の遺構の覆土中に入ったものは出土遺構の項で扱った。石器は遺構覆土への混じり込みが多く、時期が決めがたい。このため、遺構出土の石器のうち剝片石器以外は出土遺構ごとに掲載し、剝片石器は最後にまとめた。また、遺構出土の遺物は断りがない限り覆土中からの出土である。

2. 縄文時代の遺構とその出土遺物

遺構は埋甕をⅠ区で3基、Ⅱ区で5基、土坑3基を検出し、他に遺物が原位置に近いと考えられる状態で出土している。縄文期の包含層はⅠ-1区の落ち際より西に広がり、005と呼称している。Ⅰ区東側の低地部の包含層下部は、弥生土器が少なくなるが、層的に明確に分けることはできない。

(1) 埋甕

ST004 (Fig. 6, 8) Ⅰ区で検出した3基はいずれも調査区東側の包含層としている箇所で検出した。検出レベルより下でも若干の縄文土器が出土している。埋甕はほぼ直立し、口縁部と底部を欠く。口縁部は後世の削平によるものと考えられる。掘方は断面で甕に密接するそれらしきものを確認したが明確ではない。4は埋甕本体の深鉢で脛部下部から中位が焼存する。出土状況から脛部が1周するはずであるが接合できず、復元的な作図を行った。外面上部は2枚貝による条痕調整を上方向に施し暗褐色を呈す。下部はヘラ状工具により条痕上に搔き上げ淡灰色を呈す。内面はナデ調整で下部は使用によると思われる暗い色調である。気泡、種子状圧痕が多い。

ST013 (Fig. 6, 7) 直立する深鉢で上方向からの圧力で四方に広がった状態で出土した。脛部中位まで残存し、底部は底を欠く。掘方は確認できなかった。3は埋甕本体の深鉢である。底部を焼成後に打ち欠く。外面は条痕風に搔き上げる粗い削り調整で部分的に横方向にナアた箇所がある。内面には横方向の削り状の痕跡があるがナデ消されている。内外面とも灰褐色を呈し、1から3mm大の気泡、压痕状のくぼみが多く見られ、全体に軽い。

ST014 (Fig. 6, 7) 直立する甕で底部を欠き、細かく割れている。掘方は確認できなかった。1、2が埋甕本体の深鉢である。接合がうまく行かず出土状況から復元的に作図した。外面脛部中位から口縁部までは横方向の2枚貝条痕が明瞭に残る。下部はヘラナデ風の調整である。内面は口縁部付近は横方向の2枚貝条痕調整で他はナデ調整を施す。外面は上部が淡橙色、下部は茶褐色、内面は黄色がかった淡茶色を呈す。

ST114 (Fig. 6, 8) 直立する甕である。南側を欠き、攪乱によると考えられるが確認できなかった。掘方は、図6のように断面でのみ確認した。口縁部から脛部下半が残存し、底部を欠く。5が埋甕本体の深鉢である。外部は2、3cm幅の2枚貝状の条痕を上部は横方向、下部は斜め方向に施し、下部はその後ナデ調整を施す。内面は口縁部付近に横方向の条痕状の調整が残るが、全体をナデ調整で仕上げる。下部にもわずかに条痕状の痕跡がある。外面は中位が輪状に灰茶色、他は淡橙色、内面灰褐色を呈す。胎土に砂粒が多い。3cm幅ほどの粘土帯の痕跡が観察できる。

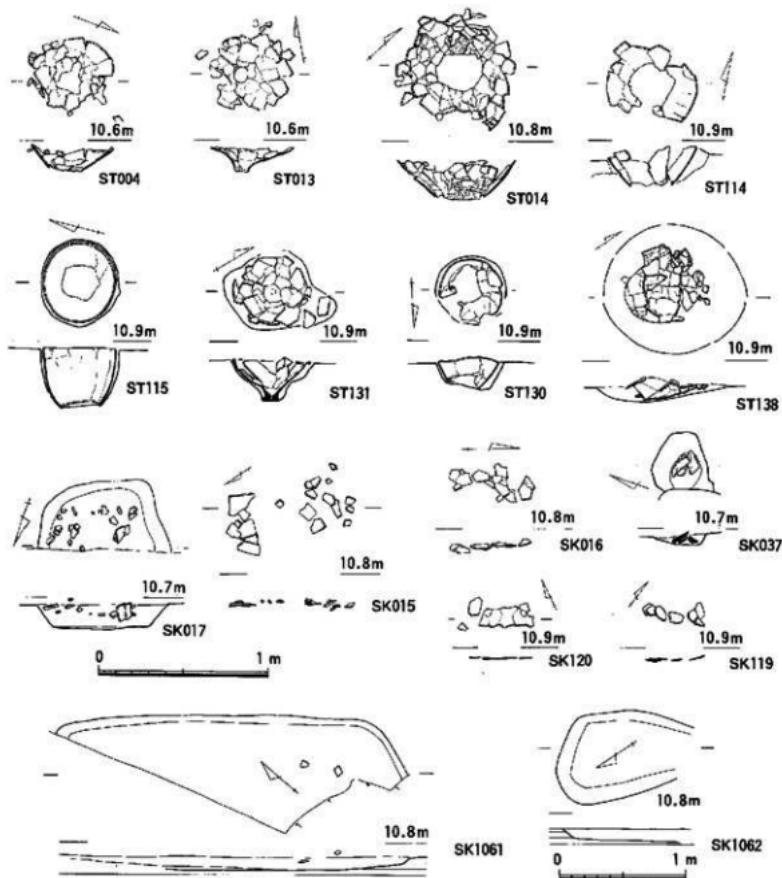


Fig. 6 純文時代遺構尖測図 (1 / 30、40)

ST115 (Fig. 6, 8) 直立する壺で口縁部から胴部下半が残存し底部を欠く。握方は壺に密着した状態で確認した。6が埋壺本体の粗製深鉢で口縁部がわずかに内凹する。外面上部は横またはわずかに斜め方向の条痕状の調整で、中位以下はその跡に下から上への斜方向に条痕状の調整を施す。内面は上部は横方向の板ナデ状の擦痕、中位はヘラナデ状、下部はナデ調整を施す。外面灰茶褐色、内面暗灰褐色を呈す。

ST014



ST013



0 10cm

Fig. 7 純文時代造構出土遺物実測図 1 (1/4)

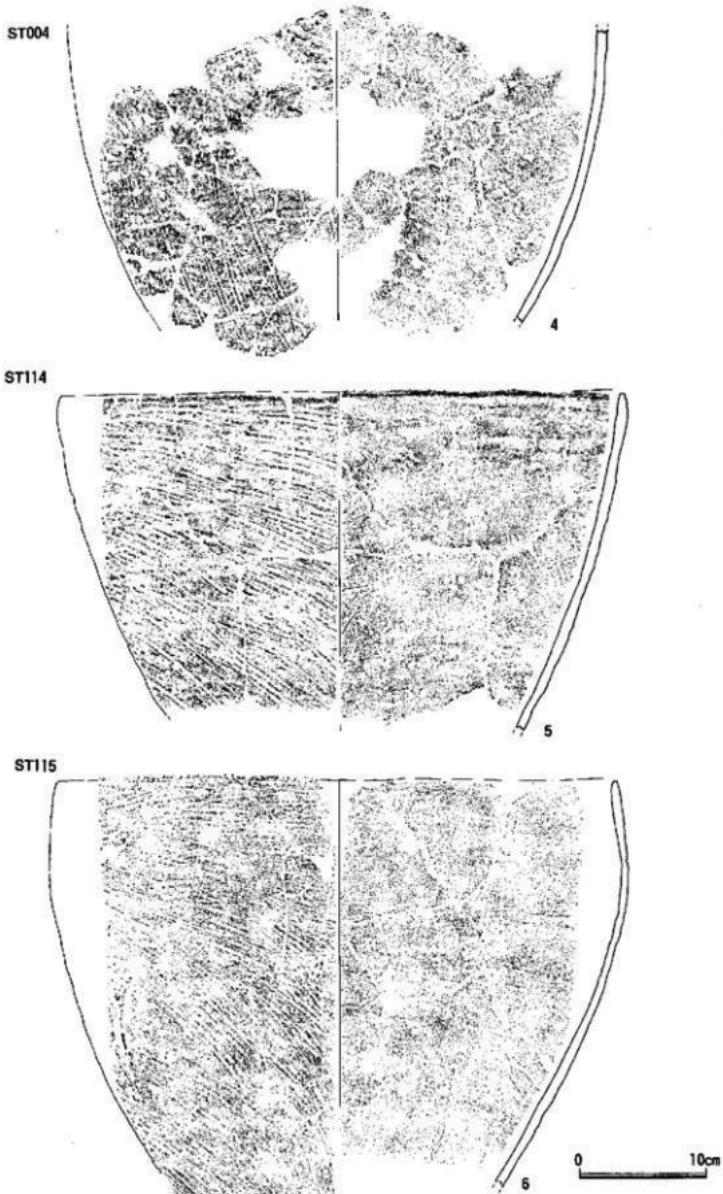


Fig. 8 繪文時代遺構出土遺物実測図 2 (1 / 4)

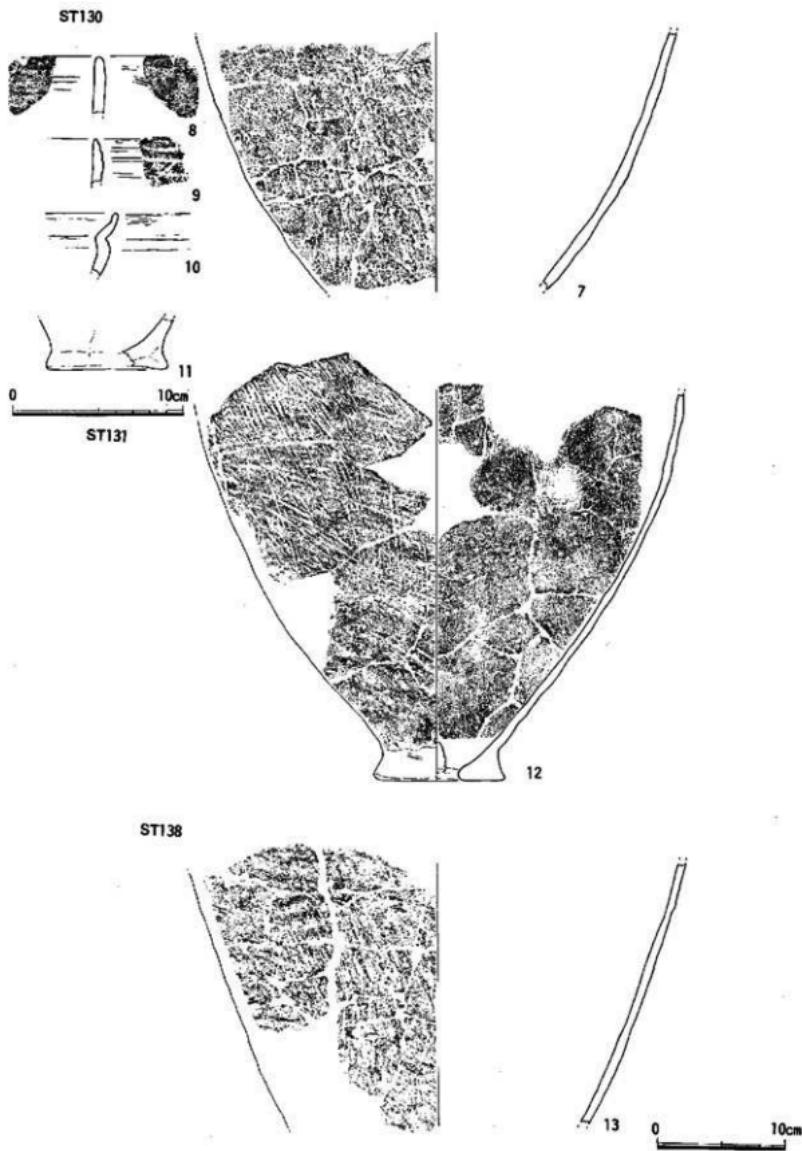


Fig. 9 繩文時代遺構出土遺物実測図 3 (1/4、3)

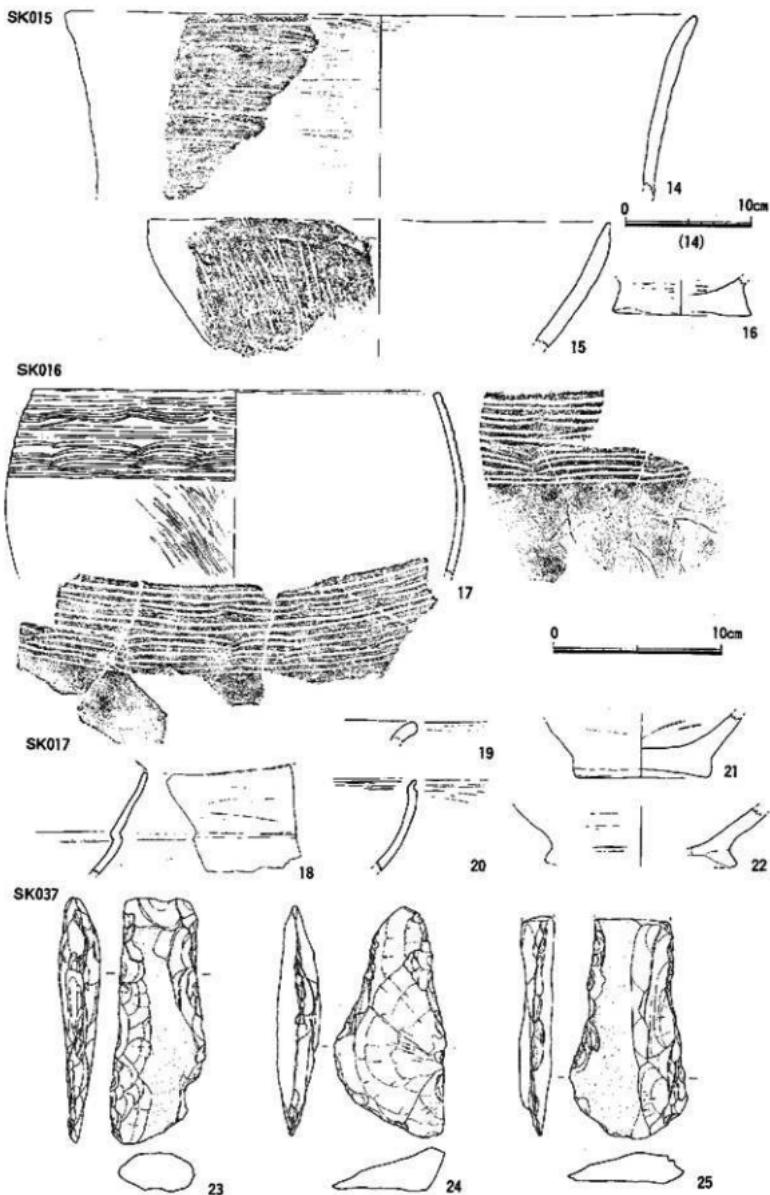


Fig.10 縄文時代遺構出土遺物実測図4 (1/3、1/4)

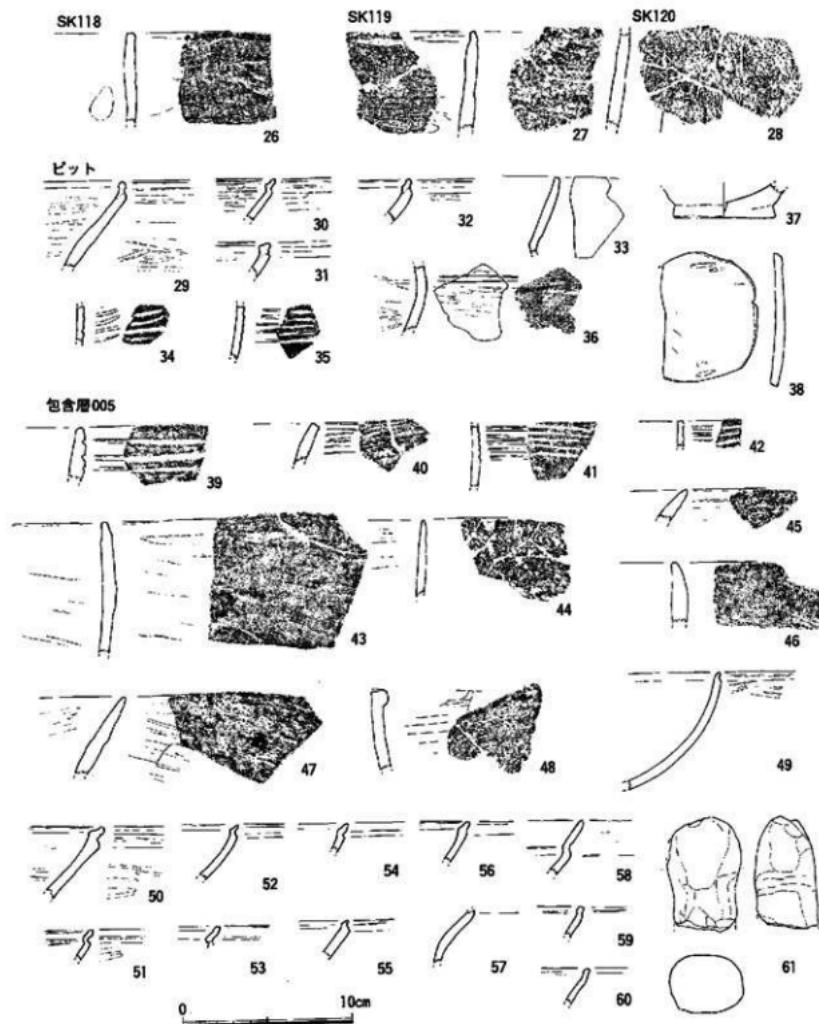


Fig.11 純文時代遺構出土遺物実測図5 (1/3)

ST130 (Fig. 6、9)直立する壺で底部を欠き胴部下半部が残存する。北東側を一部搅乱でこわされる。掘方は壺に密接する。7は埋壺本体で粗製深鉢で復元的に作図した。外面はヘラナア風の幅7mmほどの削り調整を横方向に施し 内面は器面が荒れており詳細不明。下部に削り状の痕跡がわずかに見られる。8から11は壺内より出土した。8は粗製の鉢、9は鉢で4本の沈線がめぐる。

ST131 (Fig. 6、9) 直立する壺で底部から胴部下半が出土した。底部には焼成後の孔を穿つ。根方は壺に密接する。12は埋壺本体の深鉢である。外面は条痕風に下から上方向に斜めに削り、底部付近は横方向に削る。内面は丁寧なナデ調整を施す。気泡、種子圧痕状のくぼみが多く見られ、胎土は細かく軽い。外面は茶褐色で拡散した黒斑が見られ、内面は灰色を呈す。

ST138 (Fig. 6、9) 砕屑を掘り込んだ浅いくぼみに壺が横倒しにつぶれた状態で出土した。壺は底部を欠く。13は埋壺本体の深鉢で十分な復元ができず、傾き、径は推定である。外面下半部は幅3から5mmの繊維状を束にした様な工具でかなり粗く上方向に削り、粘土の動きが著しい。上部は下部の調整の後に幅のある工具で板ナデ状の調整を横、斜め方向に施す。内面は粗ており調整不明。外面は淡灰褐色から灰褐色、内面は上部は淡橙色で下部は漸移的に茶褐色になる。気泡が多く種子状の圧痕多い。器壁に3、4cm幅の粘土積みの痕跡が残る。

(2) 土坑その他

SK015 (Fig. 6、10) I-1区包含層の下部で淡青灰色シルト上面に貼り付いた状態で大型の深鉢片が比較的まとまった状態で出土した。14は粗製の深鉢で外面条痕調整、内面ナデを施す。他に同一個体と思われる破片が多いが接合しない。15は粗製の鉢、16は深鉢の底部である。

SK016 (Fig. 6、10) I-1区包含下部で精製の鉢が内面を上にしてつぶれた状態で出土した。大きく2破片に接合した。17は精製の鉢で外面研磨調整で暗褐色を呈し、ヘラ描きによるやや崩れた連弧文を施す。

SK017 (Fig. 6、10) I-1で検出した不整形の土坑でI-2で検出できなかった。深さ15cmが残存する。覆土はやや暗い青灰色粘土で地山となる青灰色粘質土との区別は難しい。覆土から18から22が出土した。18は浅鉢で波状口縁。19は鉢または壺で赤色顔料を施す。

SK037 (Fig. 6、10) I-2区の38×35cm、深さ7cmほどのピットから玄武岩製の打製石斧が3つまとまって出土した。石斧はやや乱れはあるものの東西方向に並んでいる様で、意識的に埋めた状態と考えている。23から25が出土した石斧である。

SK118、119、120 (Fig. 6、11) SK118から120はII-1区東側で同一個体の土器がまとまった状態で出土したものである。掘方は確認できていない。SK118は26の粗製の深鉢である。SK119は27の深鉢で外面ケズリ状の調整内面はナデである。SK120は28の深鉢で外面ケズリ調整である。

SK1061 (Fig. 6) 遺物包含層005の下で検出したくぼみ状の土坑で2.7m×0.8m、深さ10cmを測る。覆土は005と同じ淡黄茶色粘質シルトである。遺物は条痕文土器が出土している。

SK1062 (Fig. 6) SK1061に切られる。118×71cm、深さ10cmを測る。

29から38は1061、1062同様包含層下で検出したピット等からの出土である。29から36は精製の浅鉢または鉢で34、35には太く弧状の、36には細い沈線がめぐる。38は土版状で灰褐色を呈し研磨調整の浅鉢の転用である。

(3) 繩文土器包含層(Fig. 11)

T-1区西側の遺構群を調査後遺構の掘り込み面である淡黄褐色粘質シルト層からは、弥生土器をほとんど含まない繩文時代の遺物が出土し、005として取り上げた。この層の範囲はFig. 4に示した落ちより西側の部分にあたり、南側は薄く遺物もほとんど出土していない。さらに下層の層上面で上記のように、くぼみ状の土坑SK1062、1061などを検出した。39から61が包含層中の遺物で鉢、深鉢、浅鉢が出土している。48は突帯文の可能性があるが突帯部分がほとんど残っておらず不明である。61は砂岩製の石棒状の石器で先端から3.5cmが丸く、基部がすぼまる。穿孔具とされているものに類似する。

3. 弥生時代以降の遺構と出土遺物

弥生時代前期の遺構がI区西半部、II区の全域に広がる。おおむね灰茶褐色粘質シルトを覆土とする。包含層中に中期の遺物も少數ながら見られるが遺構は確認できなかった。

(1) 住居跡

限られた調査区であるため、1軒分のプランを確認できたのは1軒のみで、他は調査区外に広がる。また、検出した住居跡はI-3区に集中しており、特にII区では削平により失われたものがあると考えられる。また、I-3区には周囲と比べて深いピットがあり、主柱穴のみ残存している可能性がある。SK040とその周囲のピットはその例である。

SC021 (Fig.12, 13, 14) I-2, 3区で確認した円形プランの住居で径5.7mを測る。東側の一部はI-2調査時にやや低いレベルで確認したためプランが合っていない。遺構の残りは悪く、深さ10cm弱ほどである。壁はなだらかに立ち上がる。覆土は灰茶褐色粘質シルトである。中央には炉と考えられる径68cm程の断面レンズ状のくぼみがある。主柱穴は、深めのピットが多いため特定しがたいが、図示した4本柱と考えている。そのほか壁際にも深いピットがめぐり、SK032, 033と重なる部分に想定されるものを含めると7本になる。また、プランの外側、またはプランを切るピットが周囲に見られ、関連する可能性もある。

遺物は少なく土器は細片がほとんどであるが、北西側の床面直上に1個体の完形の壺62がつぶれた状態で出土した。床直上での出土であり、掘り込みも確認できなかったため、本住居跡に伴う可能性が極めて高いと考える。

床面には玄武岩のチップおよび粉が中央部を中心に全体に広がり、厚さ1cmに及ぶ部分もある。また、敲打具と考えられる石器が9点ほど出土しており、この住居跡が磨製石器おそらくは石斧の製作場であったと考えられる。中央土坑にも玄武岩のチップが溜まり、他に敲打具が3個出土している。このためSC021の床から2, 3cmの土を50cmメッシュで採取し、洗浄しふるいにかけた。Fig13はその作業で得られた玄武岩、黒曜石の細片の重量をメッシュごとに計測したものである。安山岩、頁岩も少量出土しているが仕分けが十分できず、今回は示し得なかった。黒曜石については炉付近が多めではあるが全体に散在する。玄武岩は炉付近とその西側、南東側に多く碎片が採集され、敲打具の出土地点と偶然とも思えるが一致する。肉眼観察ではかけ付近に粉状の玄武岩が多いが、水洗で捨えず図に反映できていない。このほか、上層掘削中に黒曜石846g、玄武岩2227gの碎片が出上している。また、石斧は剥片状に割れたものはあるが製品は出土していない。この他、水洗作業により、炉中より骨もしくは貝の細片が微量ながら出土した。種子等は確認できていない。

62以外は覆土中からの出土である。62から65は如意型口縁の壺で口縁部刻みは全面と下端がある。66, 67は突蒂文七器で前期のもの。68から73は壺で口縁部は外面肥厚を成し、72外面には赤色顔料を施す。74は高坏の脚である。75から80は繩文期のもので75, 76は滑石を多く含み沈線を施す同一個体と思われる。77から79は精製の浅鉢、80は深鉢と考えられる。85から90は敲打具と考えている石器である。85は頁岩の外面が消耗した自然縫の特に3面を使用する。86から90は玄武岩製で略球形を呈す。同様のものが8点ほど出土している。いずれも2, 3面に敲打痕が残る。91は粘板岩製の磨製片刃石斧である。590は石鎚、668は石斧である。

SC002 (Fig.15, 17) I区調査区南西端で検出した遺構でSK001に切られる。方形プランの一部を確認したのみで規模は不明で、住居跡ではない可能性もある。深さ3, 4cmほどがかろうじて残る。遺物は覆土から少量が出土している。92は外面肥厚した壺、94は壺の底部で弥生前期のもの。遺構の

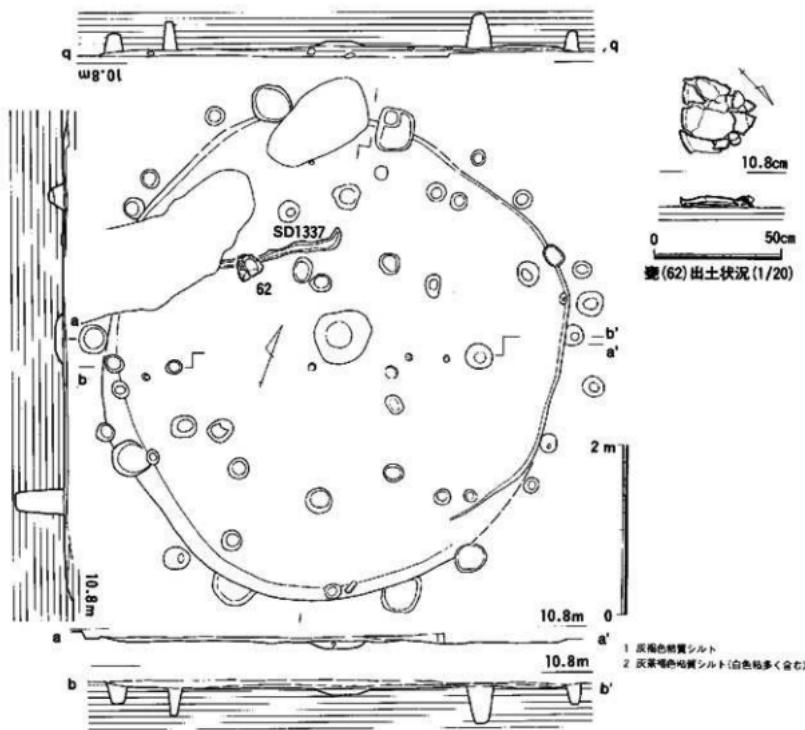
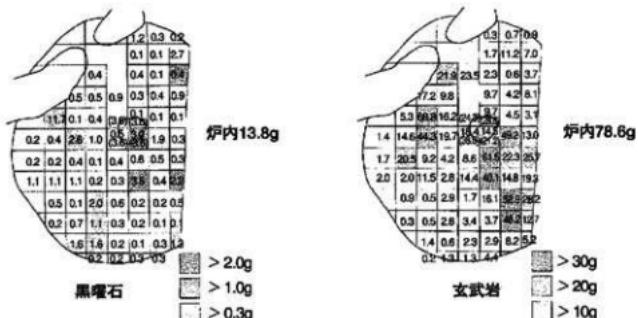


Fig.12 SC021実測図 (1/60, 20)



()内は炉内出土の破片を4等分して加えた数値

Fig.13 SC021出土石器量 (1/120)

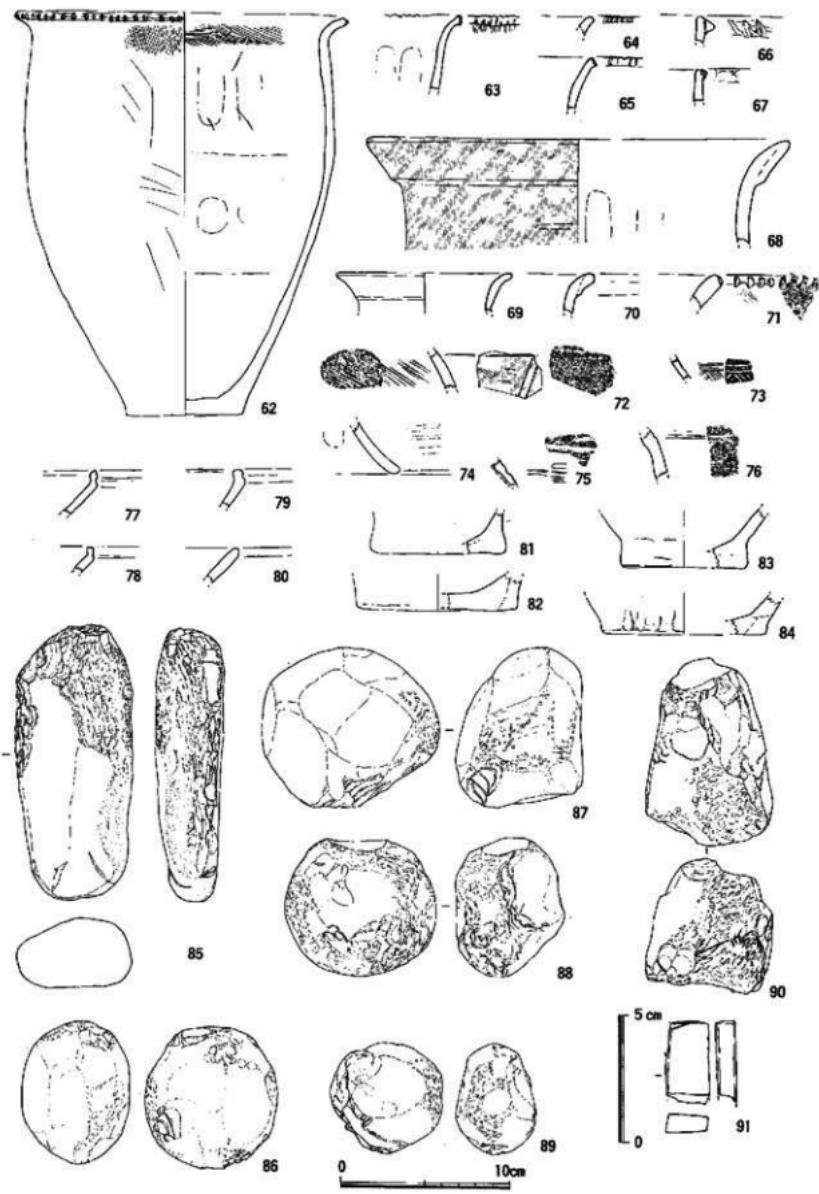


Fig.14 SC021出土遺物実測図 (1/3)

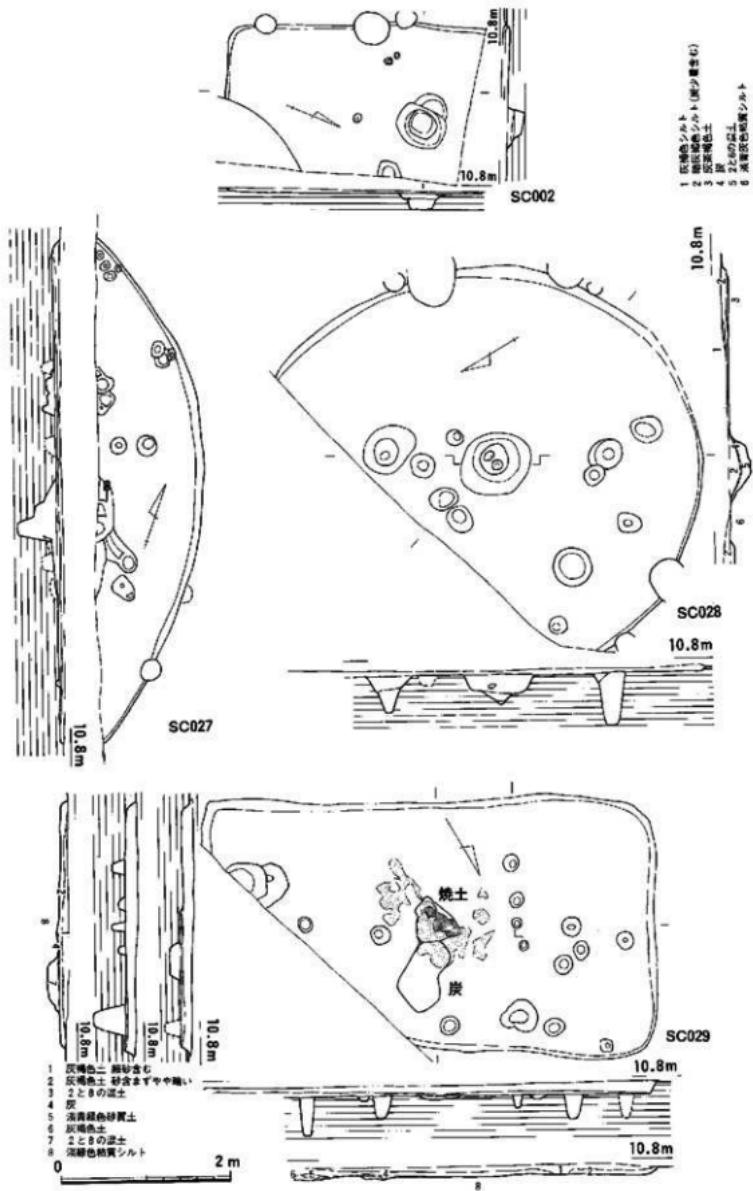


Fig.15 SC002, 027, 028, 029実測図 (1 / 60)

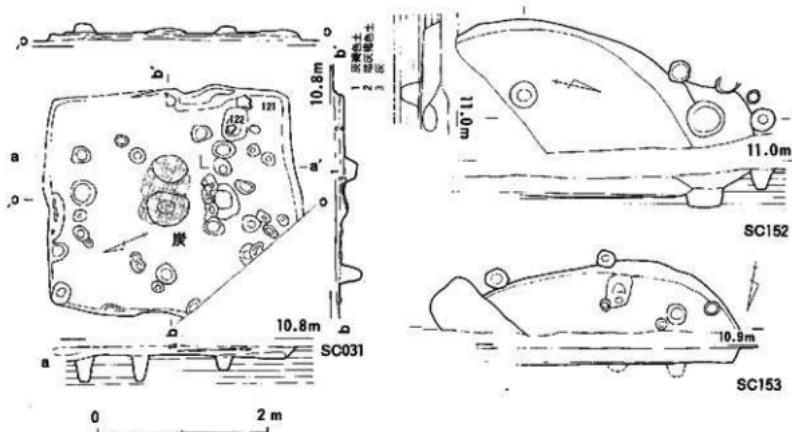


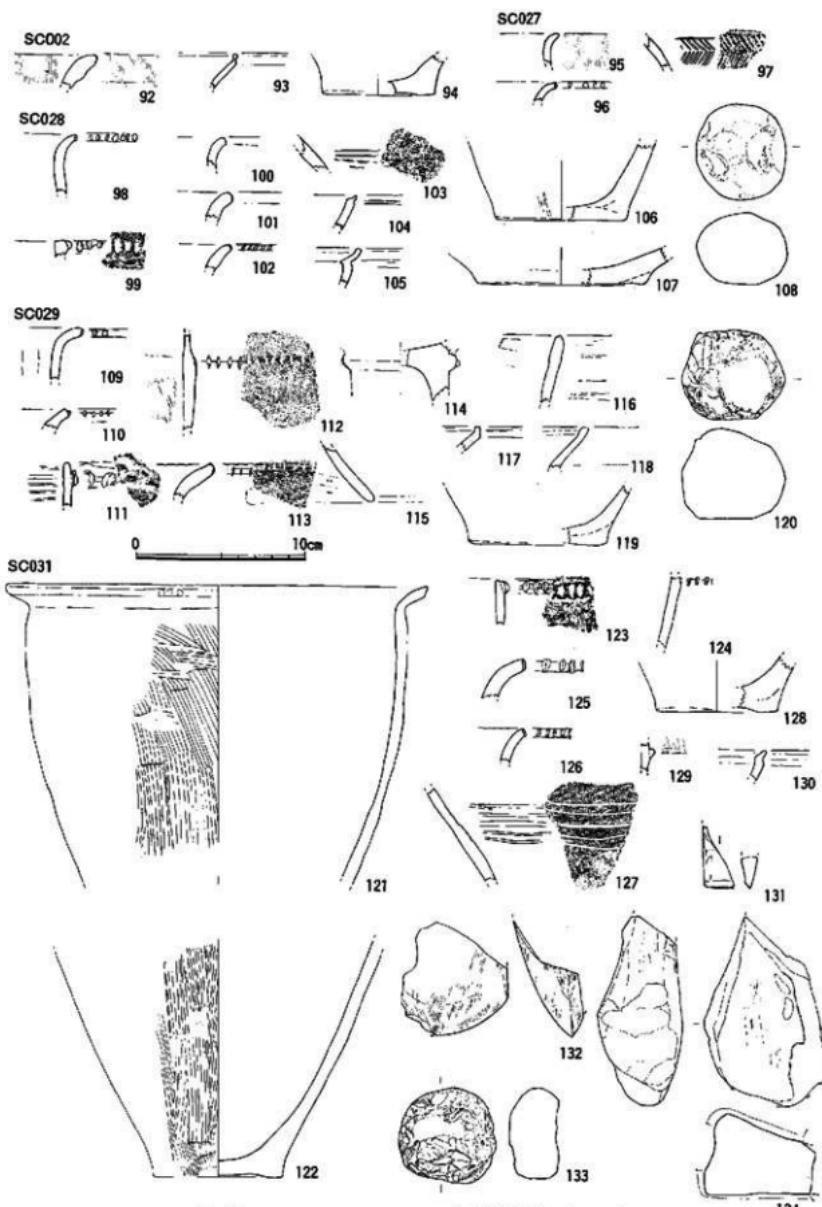
Fig.16 SC031, 152, 153実測図 (1/60)

時期に近いと考える。93の浅鉢は器面が粗る。

SC027 (Fig.15, 17) I-3区の西壁に沿って円形プランの遺構の一部を確認した。検出した範囲から径9m程が復元できる。調査区西壁際に主柱穴の一つと考えられる深めのピットがある。復元された遺構の径と、このピットの位置から類推して2本柱にしては壁に近く、4本柱以上ではないかと思われる。焼上面等は確認していない。遺物は覆土中からの出土で、95は壺の口縁部で外側に赤色顔料を施す。96は如意形口縁の壺、97は壺の肩部でヘラ描き羽状文が見られる。他に玄武岩の碎片、黒曜石、安山岩片が少量出土している。

SC028 (Fig.15, 17) I区の北端で検出した円形プランの住居跡で、北側1/3が調査区外に出る。径5.2mを測り、最大で深さ9cmが残存し、覆土は暗灰褐色シルトである。中央には82×74cm、深さ34cmの円形の土坑があり、これを挟んで1対の深いピットがある。これが主柱穴と考えられ、2本柱が想定できる。床面には部分的に玄武岩の碎片、粉が散らばるところがあるがSC021程のように密ではない。これに随連してか、中央土坑から敲打具が1つ出土している。98は如意形口縁の壺、99は弥生化した突帯文土器、100、101、103は壺で103の肩部にはヘラ描きの細い沈線が見られる。104、105は晩期の浅鉢。106は壺、107は壺の底部である。108は玄武岩製の敲打具で204gを測る。他に古銅鐸石安山岩の錐618、玄武岩の碎片、黒曜石の碎片、核、錐3個が出土している。

SC029 (Fig.15, 17) 長方形プランを呈し540×310cm、深さ13cmを測る。住居にしては小型である。中央に浅いくぼみがあり、赤茶色に焼けた粘質土がいる。焼土は140×80cm、厚さ1cmを測る。焼土の上および周辺には炭が厚さ1cmほどの層をなして埋まる。ピットは長軸に沿った位置に深めのものがあり、これらが主柱穴になるものと考えられる。遺物は覆土中からの出土で109、110は如意形口縁の壺、111は突帯文の壺で112は屈曲部に刻目を施す壺、113は壺の口縁部上、下端に刻目を施す。114、115は高壺。116は晩期の深鉢、117、118は浅鉢。119は壺の底部である。120は玄武岩製の敲打具で291gを測る。他に玄武岩、黒曜石片が少量出土している。また中央の焼土からは水洗により骨または貝の細片が微量出土している。



SC031 (Fig.16, 17) 2.7×2.9mのほぼ正方形プランを呈し、深さ13cmが残存する。覆土は灰褐色粘質土である。中央部分には50×80cmの範囲に炭が広がり、その下には西側に深さ10cmほどのくぼみが炉状を呈し、底に炭が漬まる。東側には径35cmほどのビットが見られる。床面は凹凸が著しいが貼り床は確認できなかった。ビットはやや深めのものもあるが規則性はない。遺物は小片が多いが東側に如意形口縁の壺の破片121、122が6、7cm浮いた状態で出土している。他の遺物は覆土中からの出土である。123は刻目突帯文の壺、124は壺の屈曲部に刻目を施す。125、126は如意形口縁の壺、127は壺の肩部、頸部で細く浅い弦線を施す。128は壺の底部で炉状のくぼみからの出土。129は細い突帯がめぐり赤色顔料を施す。130は晩期の浅鉢。131は粘板岩製の扁平片刃石斧、132は細粒砂岩製の磨製石斧、133は自然石を敲打具として使用する。134は砂岩の砥石で3面に使用が見られる。他に玄武岩片、小石、黒曜石碎片、剣片、鎌582、603、核等が出上している。

SC152 (Fig.16) II区南東隅で確認した弧を描くプランを確認した。円形プランとすると径7.2mほどになるものと考えられる。深さ34cmが残り、底は平坦である。覆土はでI区で住居跡としたものと異なり、床がはっきりとしないなど住居とするにはやや躊躇を覚える。遺物は少なく弥生前期の土器片が少量出土していたが、取り上げ段階で紛失してしまった。

SC153 (Fig.16) II区北端西よりで弧を描くプランを検出した。円形であれば径4.4mが復元できる。深さ20cmを測る。覆土は地山としている上との区別がつけにくい。床がはっきりせず、住居ではない可能性もある。覆土中から前期の高坏片、玄武岩碎片、黒曜石片等が出上している。

(2) 土坑

SK001 (Fig.18, 19) T-T区の西端に位置し、SC002を切る。円形もしくは橢円形の土坑になると考えられる。西側に一部拡張したが、擁壁建設時の削平により西端は失われていた。断面レンズ状を成し、下層には炭を多く含む。全体に暗灰褐色の粘質シルトを覆土とするが、中位の5層は淡黄褐色粘質土で、貼ったような感がある。141、158等が最深部より出土している。最下層の土を水洗し、獸骨小片1、骨または貝の細片を微量採集した。

135から138は如意形口縁の壺、139は尖帯文壺、140は頸部に刺突による刻みを施す。141から145は壺、146は鉢、147は晩期の浅鉢である。148は頁岩製で片刃石斧または砥石、149は滑石製の勾玉で両側から孔を穿つ。150から152は断面逆台形底で占手。153、154は壺、158、159は壺である。141、158が最下部から、149は水洗した土から出土した。他に玄武岩の碎片、敲打具659、石材、斧の碎片、黒曜石片、鎌562、安山岩が出上した。

SK003 (Fig.18, 19) I-1区の北壁に沿って検出した造構で青灰色粘土の地山にやや暗い青灰色粘土が漬まる。繩文晩期の造構と考えていたが造構の下部より弥生前期の土器160、162が出土したため、この時期の造構とした。他の遺物は晩期のものであり、前期の遺物が出土した部分のみ他の造構があった可能性を捨てきれない。160は口唇部の上、下端に細かな刻目を施す如意形口縁の壺、162は壺の口縁部か。163から165は晩期の浅鉢、161は粗製深鉢の胸部で擦痕が見られる。他に黒曜石片が出土している。

SK018 (Fig.18, 20) I-2区の北壁に沿って直に並ぶコーナー部分を確認した。西辺の延長がI-3区で検出されておらず、住居跡等の大型の造構にはならない。深さは10cmほどで灰褐色粘質シルトの地山にやや暗い灰褐色粘質シルトが覆土となり検出困難である。SK019と覆土が近く、切り合は不明である。床より5cmほど浮いた位置で同一個体と考えられる壺167が細片となって散っている。167は同一個体片は多いが接合しない。168は2条突帯文の屈曲部、169は晩期の浅鉢、170、171は壺である。他に黒曜石片が出土している。

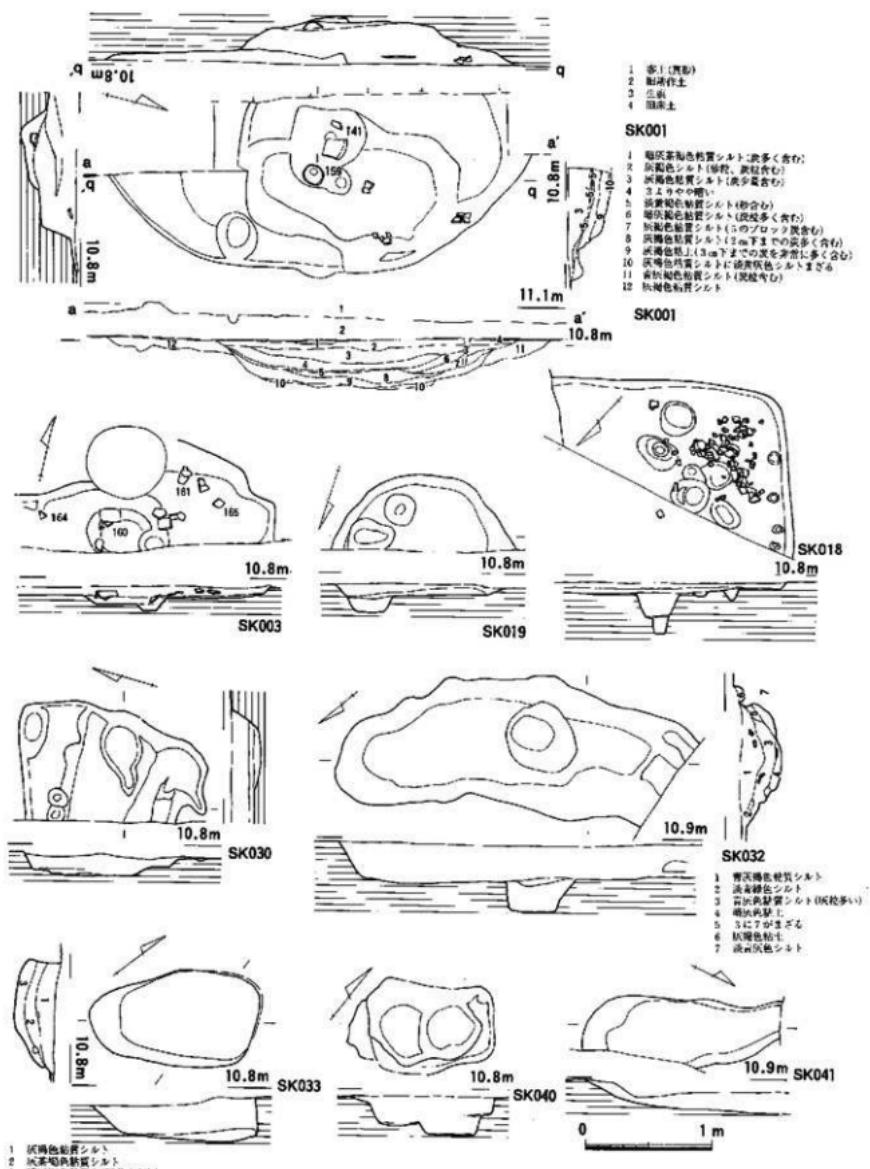


Fig.18 I 区上坑実測図 1 (1 / 40)

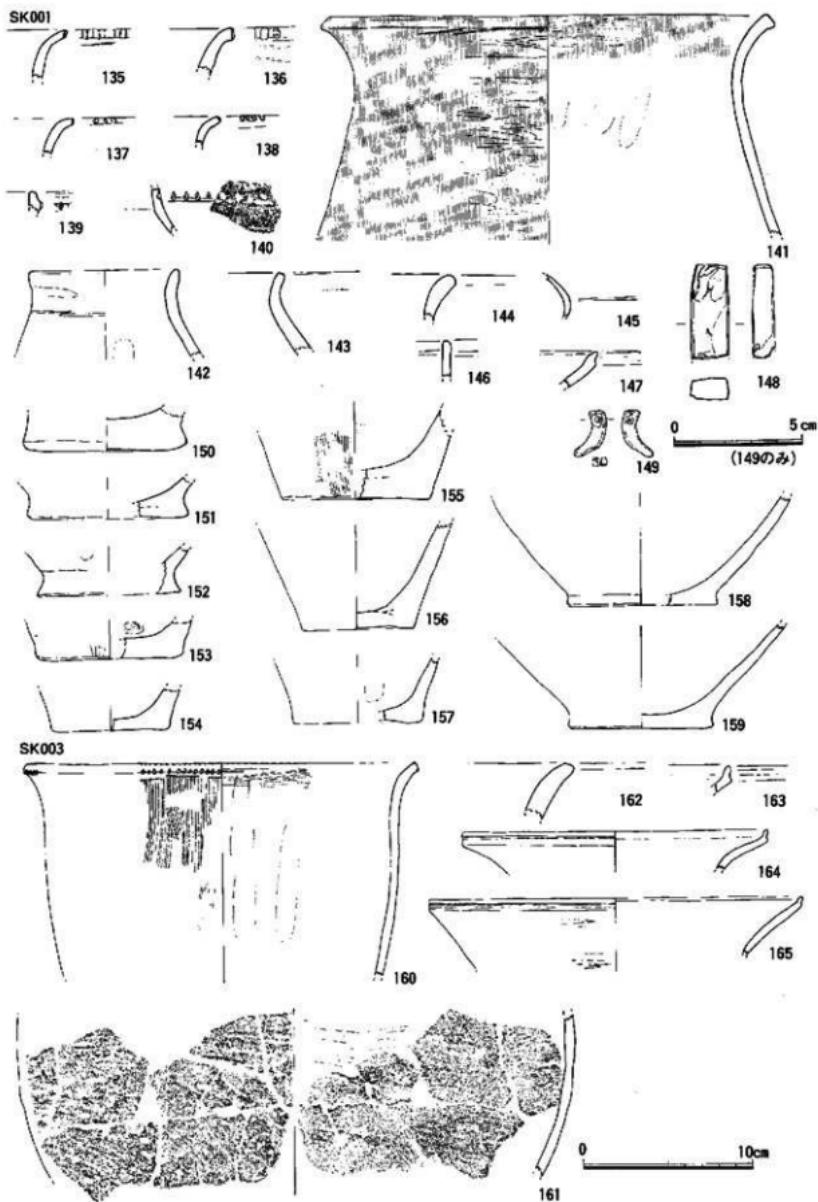


Fig.19 I区土坑出土遺物実測図1 (1/3、4)

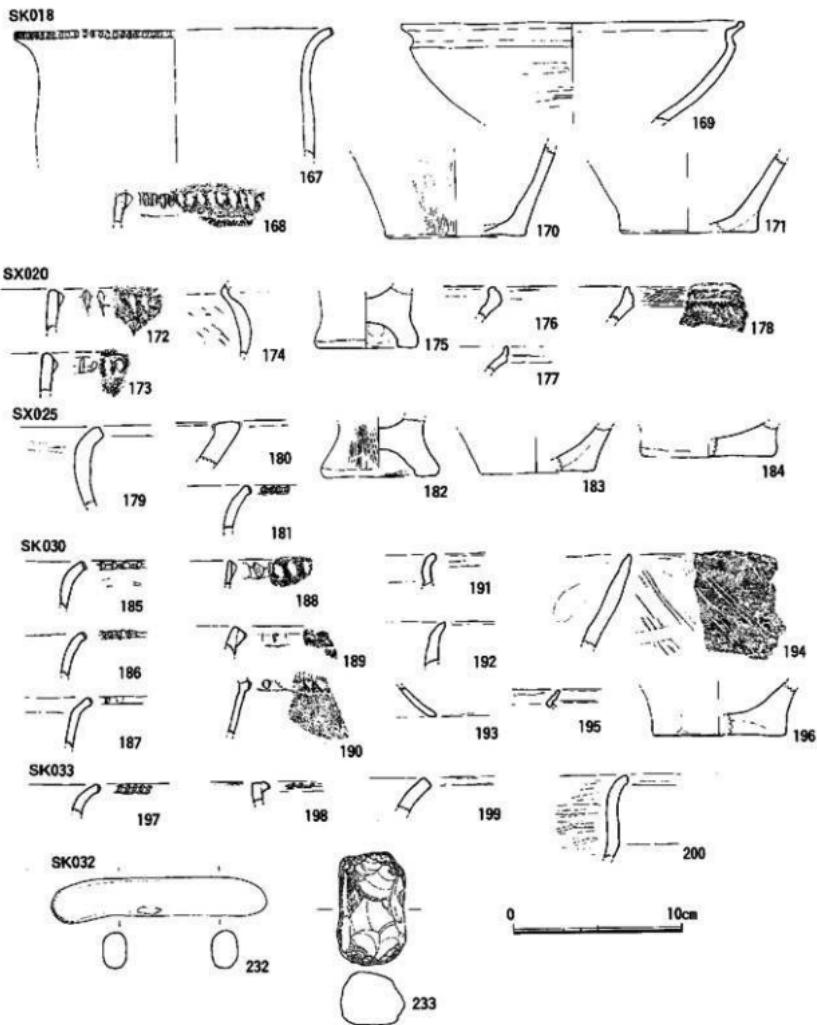


Fig.20 I 土坑出土遺物測圖 2 (1 / 3)

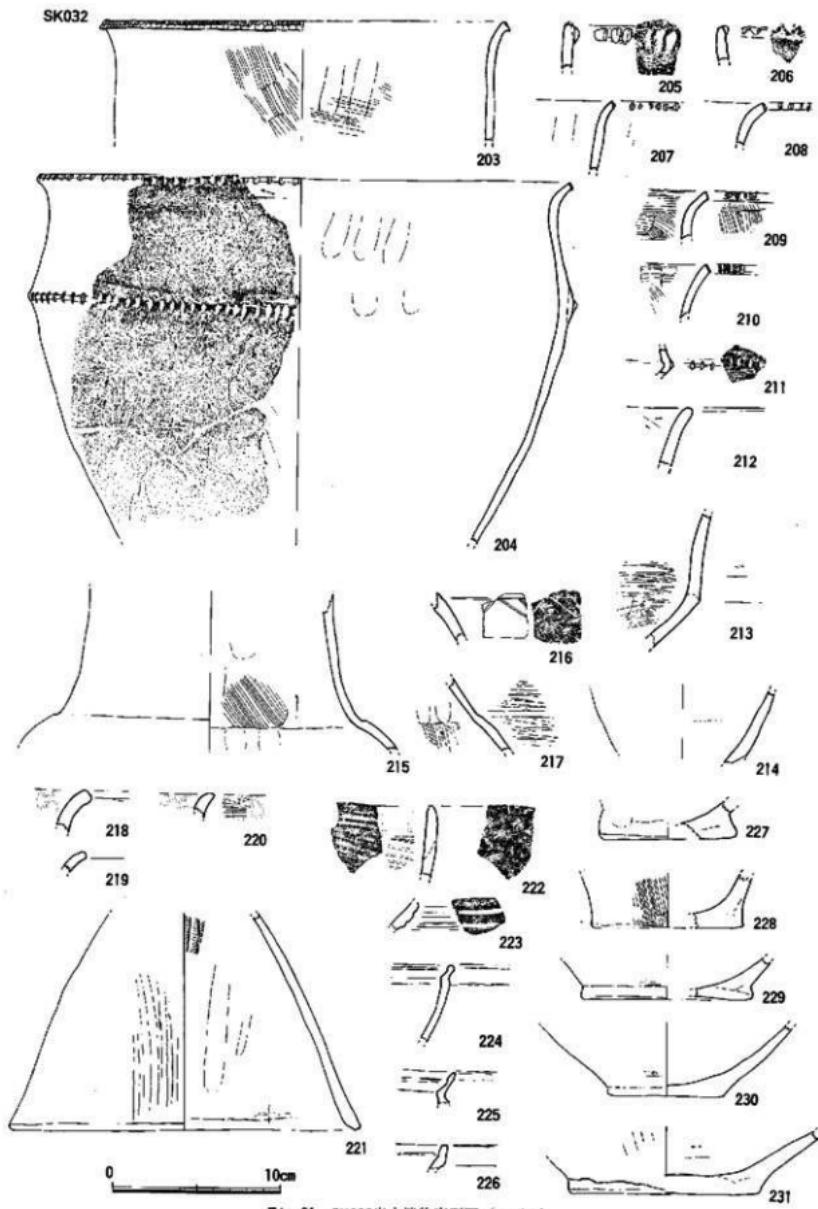


Fig.21 SK032出土上遺物実測図 (1/3)

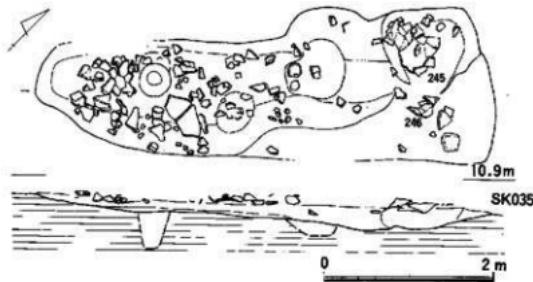


Fig.22 SK035実測図 (1/30)

SK019 (Fig.18) 弧を描くプランの一部を検出した。深さ10cm弱を測る。遺物は覆土中より玄武岩石片、黒曜石片が出土している。

SK030 (Fig.18, 20) I-3区北西隅に位置し西側の調査区外に伸びる。深さ17cmほどで2段掘り状を呈す。遺物は覆土中からの出土で185から187は如意形口縁の壺、188から190は突帯文壺で弥生化したもの。191、192、195は晩期の浅鉢、194は深鉢。193は高坏、196は壺である。他に石鐵581、玄武岩、安山岩片が出土している。

SK032 (Fig.18, 20, 21) S C021と重なる溝状の土坑で幅100cm深さ40cmを測り、西側は調査区外に伸びる。青灰褐色、灰褐色の粘質土を覆土とし、S C021との切合は判りにくい。SK032がS C021を切るように見えたが不明確である。3層と4層の間には白色の纖維状(石綿状)のものが広がり、3層には炭が多い。床よりやや浮いた状態で大きめの土器片が出土した。203、207から210は如意形口縁の壺で203は口唇部上側に浅い刻目を施し、下端が張り出す。204、211は胸部が屈曲する壺である。212、213、214は鉢。215から220は壺で、218、220には赤色顔料を施す。221は高坏の脚と考える。222は深鉢、223から226は晩期の浅鉢である。227は古手、228は壺、229は浅鉢、230、231は壺の底部である。232は長細い変成岩礫を叩き具として使用し、233は玄武岩製の敲打具で石斧の軸用と考えられる。他に玄武岩製の球形の敲打具2個、碎片、安山岩片、黒曜石片、鎌、微量の骨または貝片が出土している。

SK033 (Fig.18, 20) S C021を切ると思われるが覆土が区別し難く、不確定である。平面プランは楕円形で70×135cm、深さ35cmを測る。北東側の壁はややオーバーハング気味である。覆土は灰褐色の粘質シルトで床から7cmほどは炭を多量に含む。覆土中から出土した遺物は少ない。197は如意形口縁の壺、198は弥生化した突帯文、199は壺、200は鉢である。他に黒曜石片が出土した。

SK035 (Fig.22, 23, 24) 5.4m×1.4、深さ20~40cm程の溝状のくぼみに多くの土器が溜まる。土器は破片は大型だが完成品がつぶれたような状態は東邊に245が見られるのみである。234から236は如意形口縁の壺、237から242は刻目突帯文の壺である。243から256は壺で外面肥厚する個体が多い。245、246は同一個体の可能性がある。257は高坏258は深鉢片。259、260は壺、261、262は大壺の底部である。他に黒曜石片が出土した。他の遺構よりやや占い様相を示す。

SK040 (Fig.18) I-3区でSD022に切られる。100×70cmほどの不整長方形を呈す。周囲に4つの深いピットがあり、住居跡の中央土坑の可能性がある。

SK041 (Fig.18) S C028に切られる。幅60cm、長さ180cm程の細長いプランになる。028よりやや

SK035

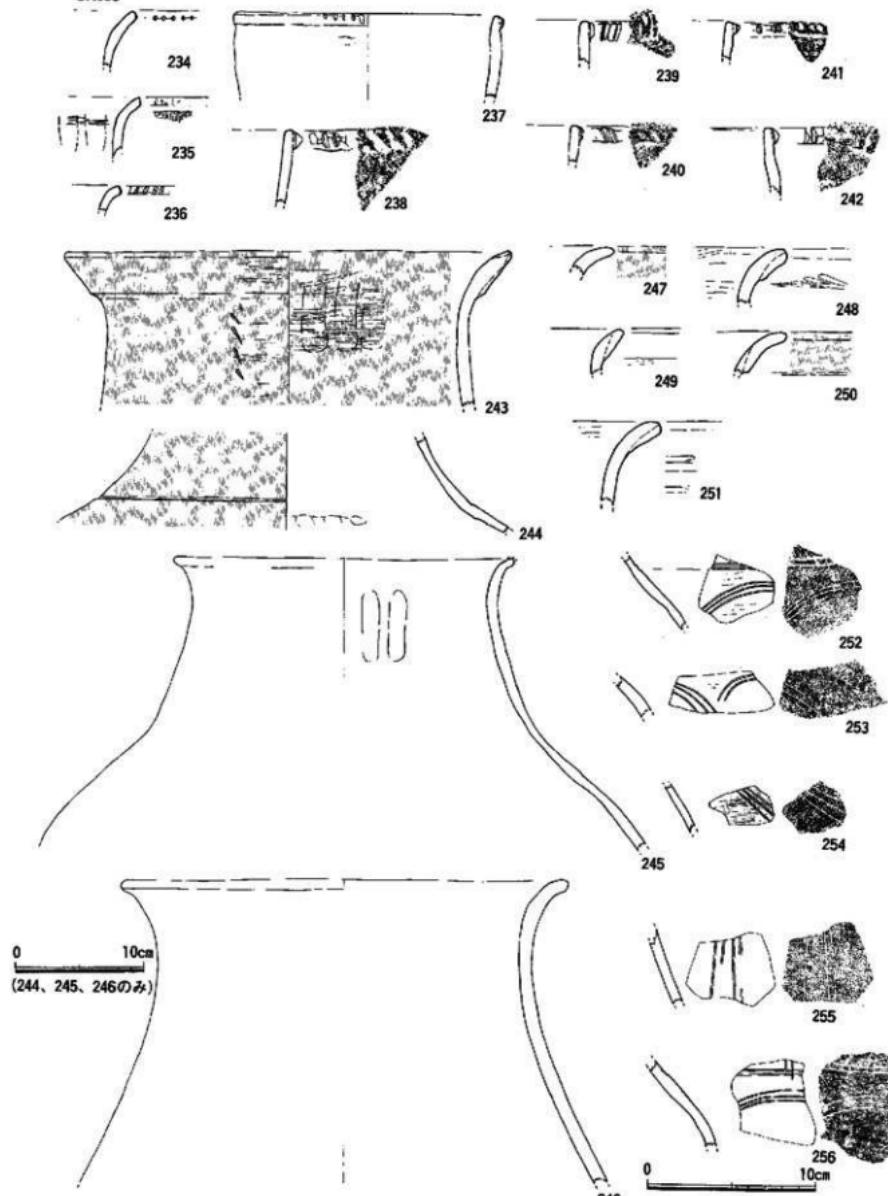


Fig.23 SK035出土遺物実測図1 (1/3、4)

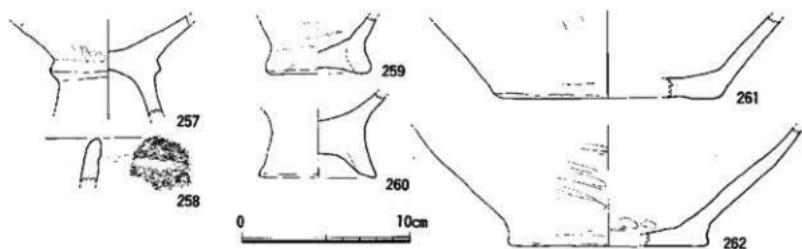


Fig. 24 SK035出土遺物実測図 2 (1/3)

暗い茶褐色のシルトを覆土とする。

SK101 (Fig. 25, 27) 440×115cmの長大な長方形プランを呈す。床は中央やや東よりに10cm弱の段差があり、深いところで深さ24cm程である。暗灰色シルトを主な覆土とする。床面には柱穴になるようなピットはない。南西隅の張り出し部は覆土が極めて近く、同じ遺構の一部か別の遺構か区別がつかなかった。遺物は覆土中からの出土で中央西端でまとまって出土したものもあるが壺の底部で圓化していない。263は突帯文壺、264は浅鉢である。265、266は深鉢、267、268は晩期の浅鉢、269は壺または鉢を転用した土版である。他に黒曜石片が出土した。

SK102 (Fig. 25, 27) 180×120cm程の規模で橢円形に近いプランを呈す。断面掘り鉢状をなし、緩やかな段をもって中央部に向かって深くなり、最深で45cmを測る。覆土は灰褐色の粘質土を主にし、全体に炭を含む。中位よりやや下のレベルで1cm幅の炭層が広がる部分がある。出土遺物は覆土下部からのものが多い。270から274は如意形口縁の壺、275、276は突帯文壺、277は屈曲部を持つ壺、278から282は壺で281、282には細く浅い沈線で文様を刻む。283、284は鉢、285から291は晩期の鉢、浅鉢、292は深鉢である。293から296は壺の297は壺の底部である。298は花崗岩で2面が擦れ、そのうち片面は焼ける。砥石か。299は砂岩製の砥石、300は滑石の石版、301は敲打具で石斧の転用である。他に黒曜石片が出土している。

SK103 (Fig. 25, 28) 100×46cmの長楕円形を呈す。深さ5cm強で南西隅はピット状に深い。灰色粘質シルトを覆土とする。遺物は覆土中からの出土で302は如意形口縁の壺、303、304は壺、305、306は深鉢、307、308は晩期の浅鉢。309、310は壺、311は壺の底部である。他に黒曜石片、安山岩片が出土している。

SK104 (Fig. 25, 28) 150×55cm、深さ11cm程の長楕円形を呈す浅い遺構で、礫層に掘り込み暗灰褐色土を覆土とする。312、213は小型の壺で同一個体の可能性がある。314は如意形口縁の壺で刻印の有無は荒れており不明。315は浅鉢。316は壺の底部。317は深鉢である。黒曜石、安山岩片が少量出土している。

SK107 (Fig. 25, 28) 165×83cmを測り隅丸長方形を呈す。深さ14cm程で暗褐色シルトを覆土とする。318は口縁に大きな三角突帯を持つ壺、319は刻目突帯文壺、320は壺、321は壺の底部である。322は頁岩製の石斧、323は叩き石である。他に黒曜石、安山岩片が少量出土している。

SK109 80×58cm、深さ15cmを測り、灰茶色シルトを覆土とする。

SK112 (Fig. 25, 28) 70×58cm、深さ6cmを測る。礫層に掘り込み緑色がかった灰色土を覆土とする。324は如意形口縁の壺、325、326は壺で326は細く浅い3本の沈線を施す。327は壺の底部、328

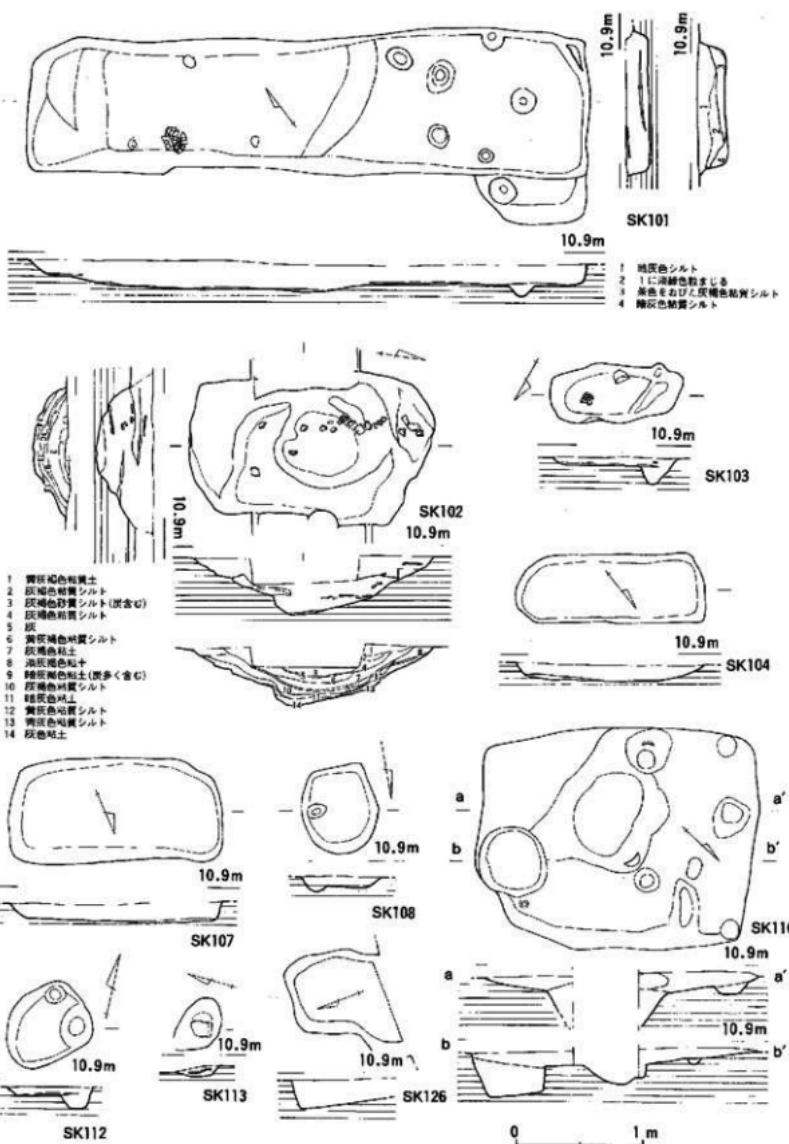


Fig.25 II区上坑実測図1 (1/40)

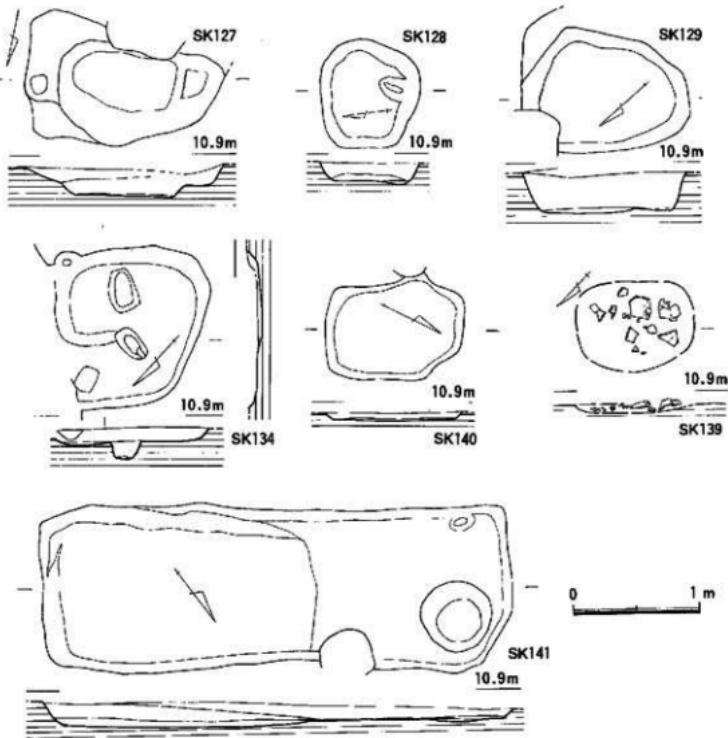


Fig.26 II区土坑実測図2 (1/40)

は晩期の浅鉢である。

SK113 (Fig. 25, 28) 碓層に掘り込む深いピット状の遺構に壺の大きめの破片が出土した。一個体分の上部が削平された可能性も考えられる。331は壺で指押さえ痕が残る。1/3程が残存する。外面が赤みを帯び、2次焼成によるものか

SK116 (Fig. 25, 28) 220×180cmの略方形を呈す。壁の立ち上がりではなく、中央に向かって次第に深くなる。中央部は径80cm程の落ちがあるが、ちょうど中央に攪乱となる杭があり床等は不明である。329は砂岩製の砥石で使用面は黒化し、焼成によると思われる。330は滑石製の錘と考えられ、870gを測る。

SK117 (Fig. 4) II区東壁に接する。長さ80cmを測り、断面掘り鉢状を呈す。如意形口縁の壺片、玄武岩碎片等が出土している。

SK123 (Fig. 4) S D133に切られ底部分のみが残存する。140×70cm、深さ15cmを測り、茶褐色粘質シルトを覆土とする。

SK125 (Fig. 4) 120×55cm、深さ37cmを測る。如意形口縁壺、壺、玄武岩碎片、黒曜石片等が出

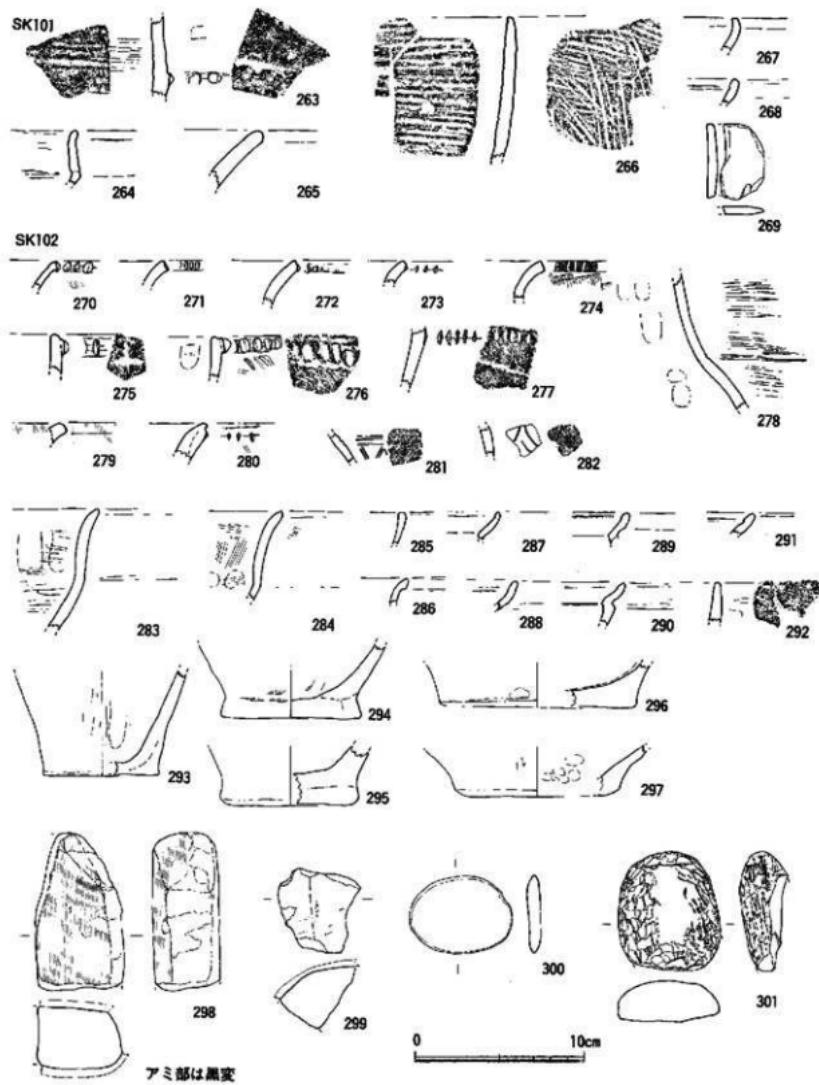


Fig.27 II区土坑出土遺物実測図 1 (1/3)

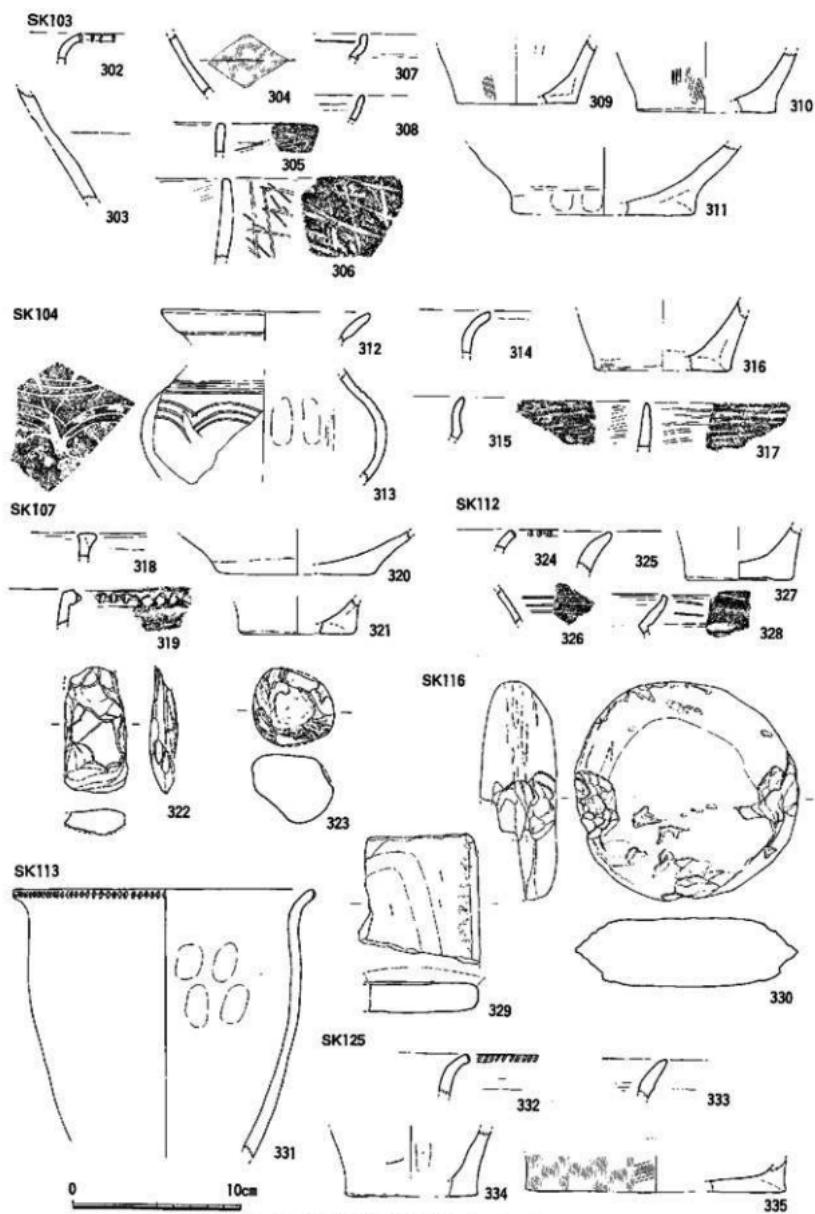


Fig.28 II区出土遺物実測図2 (1/3)

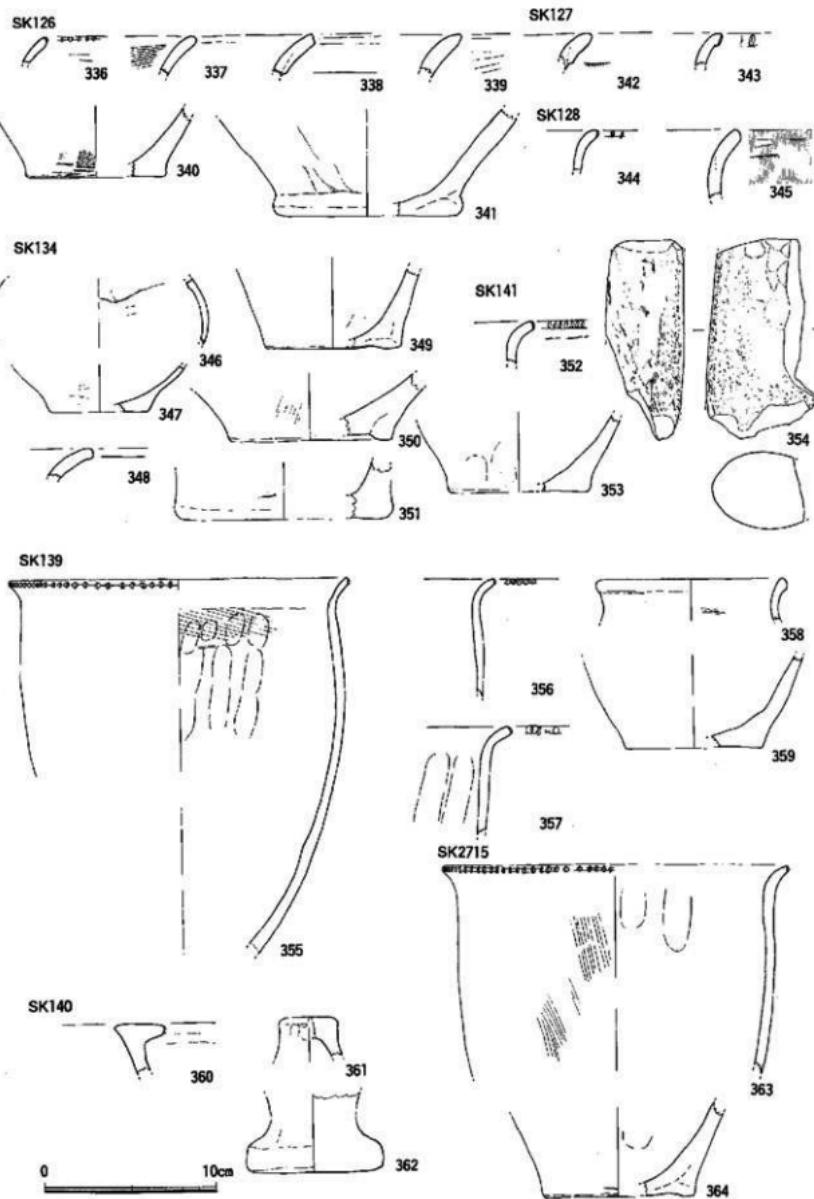


Fig. 29 II K.出土遺物実測図 3 (1/3)

上している。332は壺、壺の口縁部で334は壺、335は外面に赤色顔料を施し、壺と考えられる。他に玄武岩の碎片、黒曜石片が出土した。

SK126 (Fig. 25, 29) II区南端に位置し調査区外に伸びる。幅85cm、長さ72cm以上、深さ23cmを測る。覆土はやや暗い灰褐色粘質シルトである。336は如意形口縁の壺。337は鉢の口縁または高杯の脚、338、339は壺である。340は壺、341は深鉢の底部である。他に玄武岩碎片、黒曜石片、鐵583、安山岩碎片が出土。

SK127 (Fig. 26, 29) 158×95cmの不整形の土坑で中央部が段をなして深くなり20cmを測る。342は外面肥厚した壺、343は壺である。また、黒曜石片が出土している。

SK128 (Fig. 26, 29) 78×78cmの不整円形を呈し、深さ15cmを測る。344は壺、345は鉢または壺で研磨調整で赤色顔料を施し刷毛目が残る。玄武岩碎片、黒曜石片が出土している。

SK129 (Fig. 26) 133×103cmを測る不整梢円形を呈す。壁の立ち上がりは強く深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

SK134 (Fig. 26, 29) 不整方形を呈し、東側は浅い段落ちにより切られ削平を受けている。淡茶褐色粘質シルトを覆土とする。346、347は壺で外面は赤色顔料の痕跡が見られる。348は壺の口縁か。器面は荒れる。349は壺、350は壺、351は深鉢である。他に安山岩、黒曜石碎片少量出土。

SK136 (Fig. 26) 125×85cmの隅丸長方形を呈し、深さ9cmを測る。淡茶色粘質シルトを覆土とする。如意形壺、突帯文壺片、黒曜石片が出土している。

SK137 155×65cmの長梢円形を呈し、深さ13cmを測る。土器の小片が出土。

SK139 (Fig. 26, 29) 磁層上の浅いくぼみに土器片が散らばる。覆土は茶褐色シルトである。355から357は如意形口縁の壺で別個体。355は外面灰褐色だが中位は輪状に暗灰褐色を呈す。358は研磨溝整仕上げで壺か。359は壺の底部。他に滑石、黒曜石片が出土している。

SK140 (Fig. 26, 29) 108×78cmの長方形を呈し深さ6cmを測る。砂礫層に掘り込み、茶褐色土を覆土とする。360は中期の壺の口縁、361は壺の蓋、362は支脚である。他に黒曜石片、玄武岩製斧、砂片、安山岩碎片が出土している。

SK141 (Fig. 26, 29) 370×180cmの長大な長方形を呈す。南東側がやや深くなる。磁層に掘り込み淡茶色粘質シルトを覆土とする。長軸方向がSK102とほぼ平行する。352は如意形口縁壺、353は壺の底部である。354は玄武岩製の石斧で細かな敲打痕が残る。

他に玄武岩碎片、安山岩碎片、剝片、黒曜石片、鐵593が出土している。

SK142 (Fig. 4) 150×85cmを測り不整形を呈す。土器片と黒曜石片、鐵589が出土した。

SK146 (Fig. 4) II区の北西端に位置し梢円形プランの1/2を検出した。淡茶色シルトを覆土とする。

SK147 (Fig. 4) 隅丸長方形プランの一部を検出した。SC153を切る。淡茶色シルトを覆土とする。

SK148 (Fig. 4) 方形のコーナー部分を検出した。

SK149 (Fig. 4) 不整梢円形を呈す。南端がやや深くなり、別造構の可能性がある。

SK2715 (Fig. 29) 径50cmの円形プランを呈す。中央に遺物が集中する。363は如意形口縁壺で接合しない同一個体片が多い。364は363と同一個体の底部と思われる。黒曜石の鐵が出土している。

(3) 溝 (Fig. 4)

SD022 (Fig. 4) I区の西端をN-15.5°-Wの方向に走る。Fig. 4では表現の都合で寸断されているが、全ての遺構を切って調査区を貫通する。粗砂混じりの淡茶色砂質土を覆土とする。磨滅した赤生土器の他、黒色土器B、胎土がよい土師皿片が出土し、中世初期頃のものと考えられる。

SD151 (Fig. 4) II区の西端に南北方向に弧を描いている。上部は埋め立ての真砂で埋まり、近年まで使用されている。付け替えた水路が調査区の西に流れる。東岸に沿って上端から30cm~90cmのところに径7cm程の杭が打たれている。

SD1023 (Fig. 4) I-I区の西側をN-55°-Wの方向に走る。幅20cm、深さ5cm、延長3mを確認した。覆土はやや暗い淡茶褐色粘質シルトである。

SD1337 (Fig. 12) S C021内の北西よりにN-62°-Eの方向に走る幅10cmほどの溝で土器の下にありS K032に切られる。淡茶色粘質シルトを覆土とする。

SD1350 (Fig. 4) I-3区 S C021の南西をN-58°-Wの方向に走り幅11cm、延長2m分を確認した。住居跡の壁溝の可能性もある。

(4) 耕作痕 (Fig. 4)

小ビットが集中するなど耕作痕と呼ばれているような状況があった。

SX020 (Fig. 20) T-3区でSX020とした部分は、3×4mの隅丸方形のプランを淡茶色シルトが覆っていたため掘削したが、5cmも下げると多くの径15から30cm程の浅い断面レンズ状のビットが広がった。また、北東側に接する3×3.5m程の範囲にも同様のビット群SX021が密集する。SX020からは土器小片が出土した。172、173は突帯文の壺、174は内面削りの鉢、175は前期末の壺の底部、176、177は晩期の浅鉢、178は口縁に疑似縄文を施す後期の深鉢である。174が古墳時代で最も新しいが、遺構の時期を示すかは判断できない。

SX025 (Fig. 20) SX020の南東に接して5×3.5mの範囲に茶色がかった青灰色シルトが5から10cmの厚さ溜まり、下は疊層であった。北東から西側の隅は10から30cm幅で溝状にくぼむ。土色の違いは下層の差による可能性もある。土器の小片が出土している。179、180は中期初頭の壺、181は如意形口縁、182は前末の壺、183、184は壺の底部である。

またI区では、特に南側のI-1区に5から8cm大までのくぼみ状のビットが多く見られた。深さ

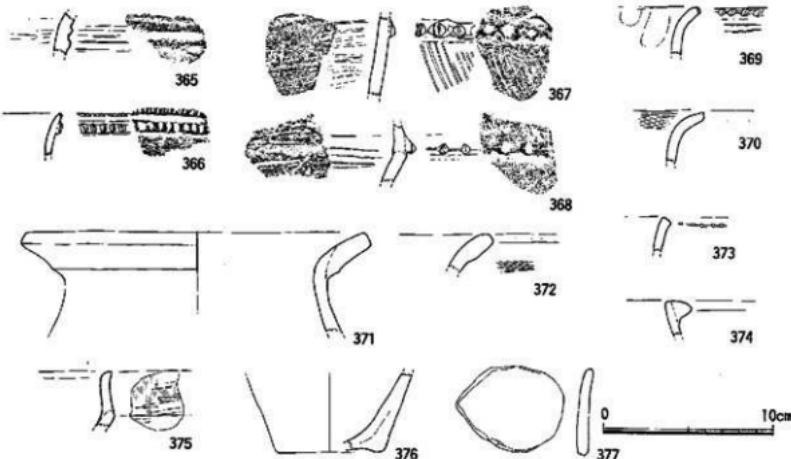


Fig. 30 I区ピット出土遺物実測図 (1/3)

はいずれも3から6cmほどで植物の生痕の可能性が考えられるが、耕作に伴うこともありうる。

II区では調査区の東側4mの範囲に径10から30cm、深さ3から10cm程のくぼみ状のピットが多い。特に北側は集中し、何らかの耕作に伴うものではと思われる。

(5) ピットと出土遺物(Fig.30~31)

多くのピットを検出したが建物として復元できなかった。ここではI区とII区に分けて出土した遺物の主なものをあげておく。もともと遺物は多くない。

365から377はI区出土である。365は太めの凹線を施す深鉢で後期のものか。366から368は突帯文土器で、366は口唇端にも細かな刻目を施し器壁が薄い。369、370は如意形口縁の壺で370には刻目がない。371、372は外面肥厚した壺である。373は外反の緩い壺の口縁端に細かな刻目を施す。374は前期末の壺。375は研磨調整の浅鉢。376は壺の底部である。377は上版で壺の転用と考える。

378から417はII区のピット出土の遺物である。378から381は晩期の精製、半精製の鉢で、378は太い、379と380は細く浅い沈線が口縁帯にめぐる。378、381は口縁の波状部である。383から388は粗製の深鉢、鉢で条痕、擦痕を施す。389から391は刻目突帯文の壺である。392から401は晩期の浅鉢で401を除いて黒色磨研の精製品である。392から395は山形のI型をなす。402は口縁部の外反が急で高坏の可能性もある。淡橙色を呈す。403は如意形口縁の壺、404は外反は小さいが同様のもので、405は粗型壺に近い突帯文期のものと思われる。406は高坏の口縁で外面に赤色顔料の痕跡がある。407は玉縁状の口縁を持ちナデ調整で器形は不明。408から411は壺で411は前期後半から末のものか。412から417は深鉢の底部で416は晩期前半のものである。

4. 包含層出土遺物(Fig.33~35)

包含層については層序でふれた様に、005とした部分以外では混じりが多く、縄文後期から弥生時代中期のものまでを含んでいた。このため、出土位置、層位に関わりなく抽出したものを掲載した。縄文土器については底部や極めて小さなものを除いてほぼ掲載しているが、弥生土器については時期的に一通りのものは掲載したが図化していないものも多い。

418から500はI区の出土である。418から424は口縁帶に沈線も他は凹線を施す鉢または深鉢で418から420が後期と考えられる以外は晩期のものである。425から430は晩期の黒色磨研の浅鉢、431と432は突帯文土器に伴う前期初めまでの浅鉢である。433から435は条痕、ケズリ調整の深鉢、436から443は突帯文土器で436、337は古い形態を示す。444はわずかに外に屈曲した口縁部に刻目を施す。445から450は如意形口縁に刻目を施す。451から462までは壺で460から462は細い沈線で山形文を描く。463は鉢で研磨調整。464から470は高坏で他に図化していない破片も多い。471は金海式壺棺の壺棺、472、473は須玖式の壺、474は須恵器でⅢ期の壺の口縁である。475は有孔土版で2.4cmの三角に近い円形で焼成後に3.5mm径の孔を穿つ。壺等の胴部の転用で2.89gを計る。476球形の十玉に孔が貫通し、十鍾と考えられる。477は土製の筋錘車である。478から485は晩期から夜白系の深鉢、壺の底部、486は浅鉢と考えられる。487から493は前期初めから末までの壺、494から500は壺である。

501から549はII区出土である。501から507は口縁帶を有する深鉢で501、502は後期、他は晩期のもので502は疑似縄文が見られる。509から517は直口の粗製深鉢で条痕調整を施し、511には刺穴による刻目を施す。518から532は晩期の浅鉢、鉢である。533から538は前期初めから末の壺、543、544は前期初めの浅鉢、539、540は須玖式の壺である。541、542、545から548は壺、549は高坏である。

686、687は土鍾で686は1/2が残存し、順に19.8、26.0gを計る。

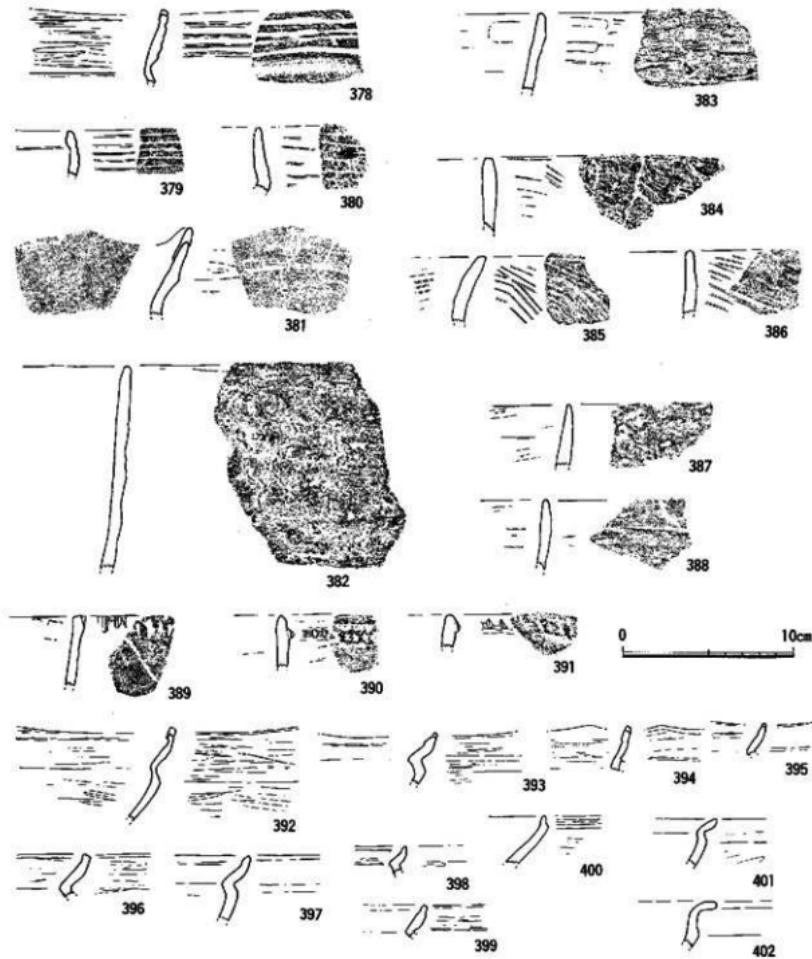


Fig.31 II区ピット出土遺物実測図 (1/3)

5. 出土石器

ここでは剥片石器、遺構に伴わない剝片石器以外の石斧等について扱う。製品についてはできるだけ図化したが、敲打具、石斧片等に行えなかったものが多い。出土位置と重量は表1に示した。

550から607は石鎌で、602までが黒曜石製、603から607は古銅輝石安山岩製である。550から557は主剝離面を残し、555までは剝片鎌である。558は小型で基部が大きく抉れる。以下抉りがやや深めのものから浅いもの、三角形を呈すものから平基鎌が見られ、592は5角形に近い。594から600までは

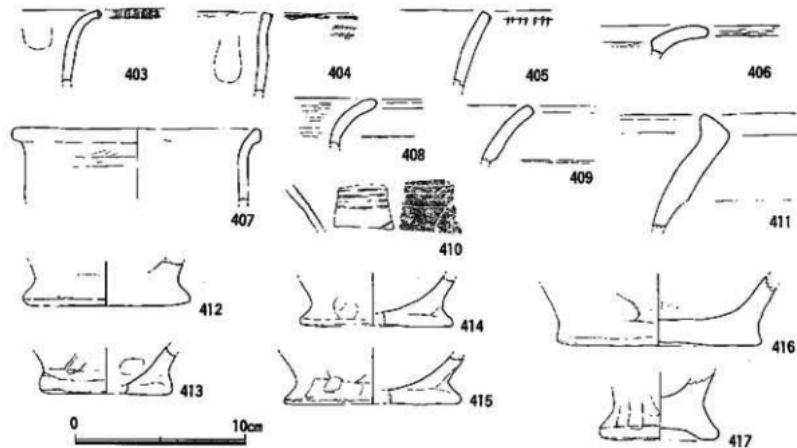


Fig. 32 II区ピット出土遺物実測図 (1 / 3)

残存部が少なく器形がはっきりしない。595は601の様な柳葉形になる可能性もある。剥片鎌以外は細かな剥離を密に行なうが、規則性はなく粗雑である。567は片面に自然面を残す。569、572、592は主剥離面を残している。602は側面に剥離を施した厚みのある素材で石鎌の未製品と考えている。608から631はスクレーパーを中心とする石器である。608から610は楕円形を呈す黒曜石製のスクレーパーで、608は自然面を残す。611から616、621、622は縦長剥片を素材とした黒曜石製のサイドスクレーパーで、調整剥離を片側または両側の側辺に主に片面から施す。617は古銅輝石安山岩の縱長剥片で側辺に使用によると考えられる微細剥離が見られる。618は古銅輝石安山岩の右錐で、剥片の先端側に細かな剥離を施し先端が尖る。619は姫島産と考えられる黒曜石製の剥片で側辺に細かな剥離が見られる。620は黒曜石のつまみ型石器で、今回1点のみの出土である。623は石匙で古銅輝石安山岩製である。横長の整った形態で、古い時期の混ざり込みの可能性が高い。624から631はスクレーパーで627が頁岩である他は古銅輝石安山岩製である。やや厚めの薄片の側面に調整剥離を施し刃部を造る。627は厚めの横長薄片の短辺部に調整剥離を施している。632から646は黒曜石の剥片で、側辺に使用によると思われる微細剥離がみられる。632は今回の調査の中では長めの縦長剥片を素材としている。642は縦横幅がほぼ同じで剥片の上下両端部には自然面が残り、原石の厚さ3.5 cmが復元できる。647から650は黒曜石の石核である。647は圓の上面と片側面に自然面を残す。上面からのみ剥離を行い、平坦打面を作っているが自然面からも剥離を行っている。648は不純物を多く含む。側面一部に自然面を残す。大きな剥離面から1方向に剥離を施す。剥片は採れても長さ2 cmほどである。649は1方からの打点があり、不定形剥片の石核である。圓の上下端に自然面が一部残る。650は圓の上と右の2方向からの打点があり、やはり不定形剥片を探している。側面に一部自然面が残る。上面は平坦面を、右側は自然面を打面としている。651は頁岩製で石槍と考えられる。摩耗が著しく上下両端が欠損する。側辺からの細かな剥離を行っている。652は粘板岩製の柳葉形の磨製石鎌である。石材は灰白色の地に黒色部が挿まり、色の差を文様的に取り入れている。先端、茎と側辺の一部は欠ける。丁寧に研磨して仕上げるが、摩耗して棱がはっきりしない部分がある。653は頁岩、654は砂岩製の片刃石斧である。653は未製品で側辺に剥離痕が残る。654は丁寧に磨いた刃部で基部は欠損する。655から658は砂岩製

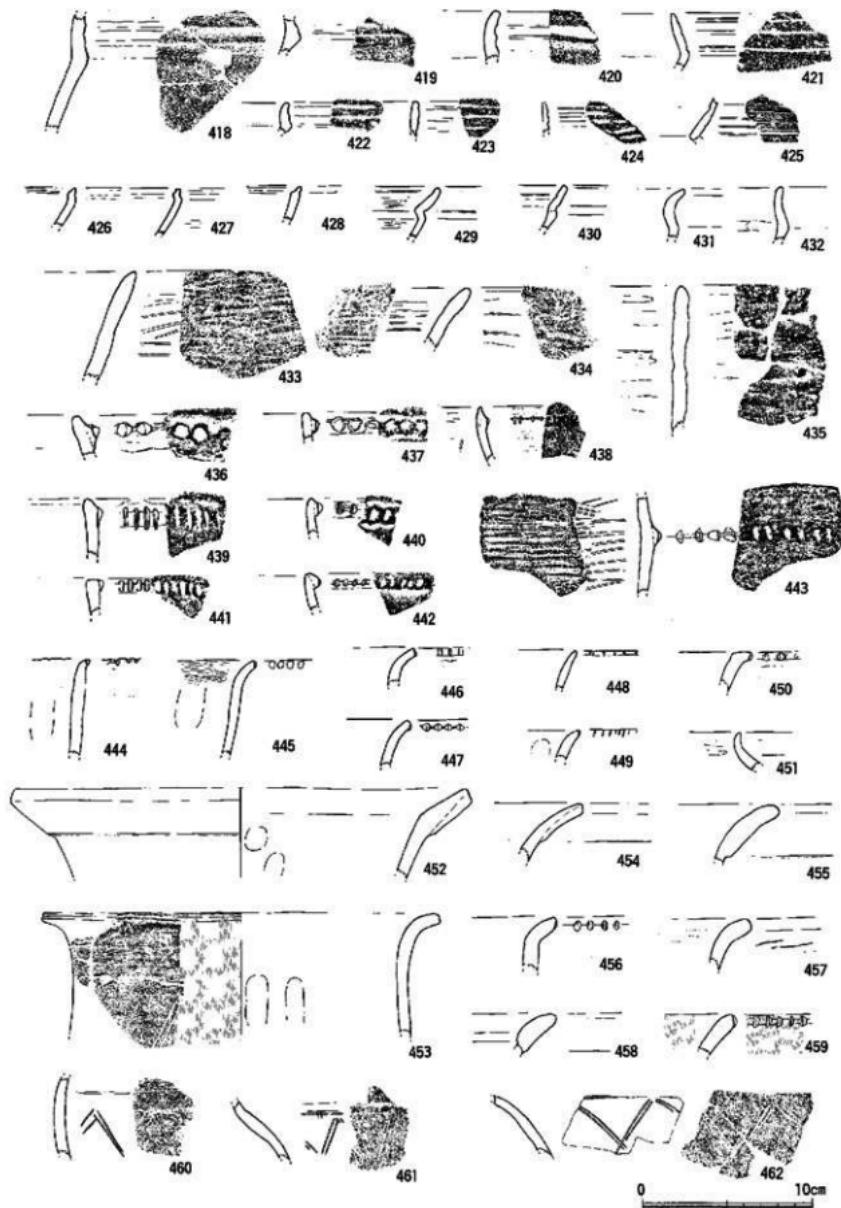


Fig. 33 1区出土:その他の遺物実測図 (1/3)

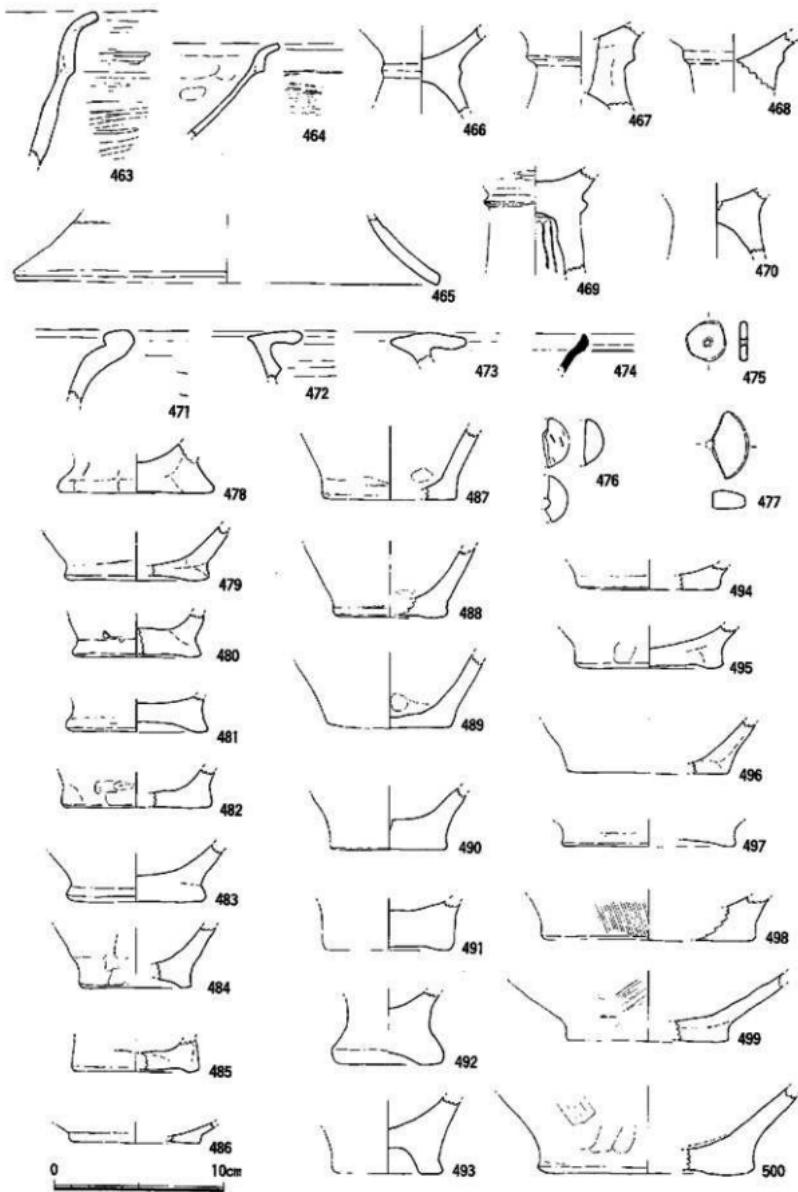


Fig.34 I区出土その他の遺物実測図 (1/3)

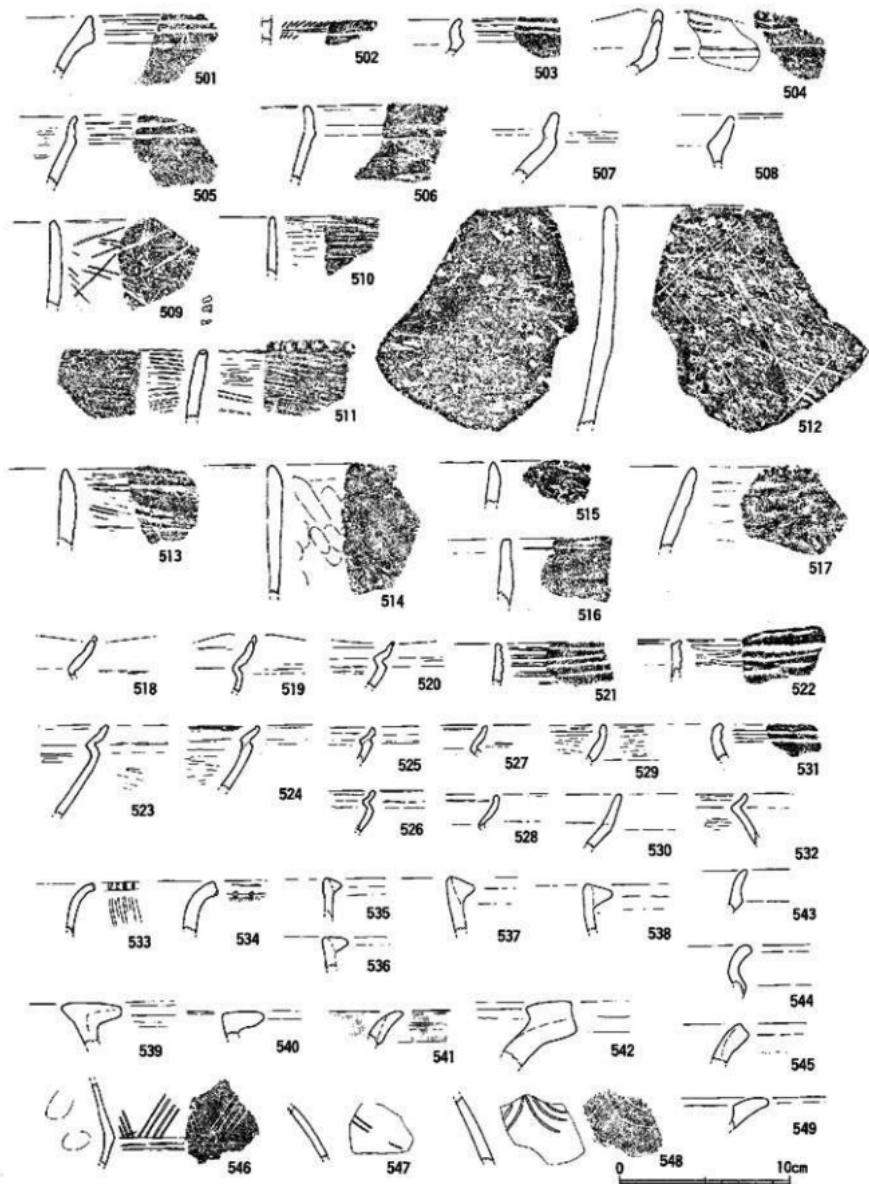


Fig.35 II区出土その他の遺物実測図 (1/3)

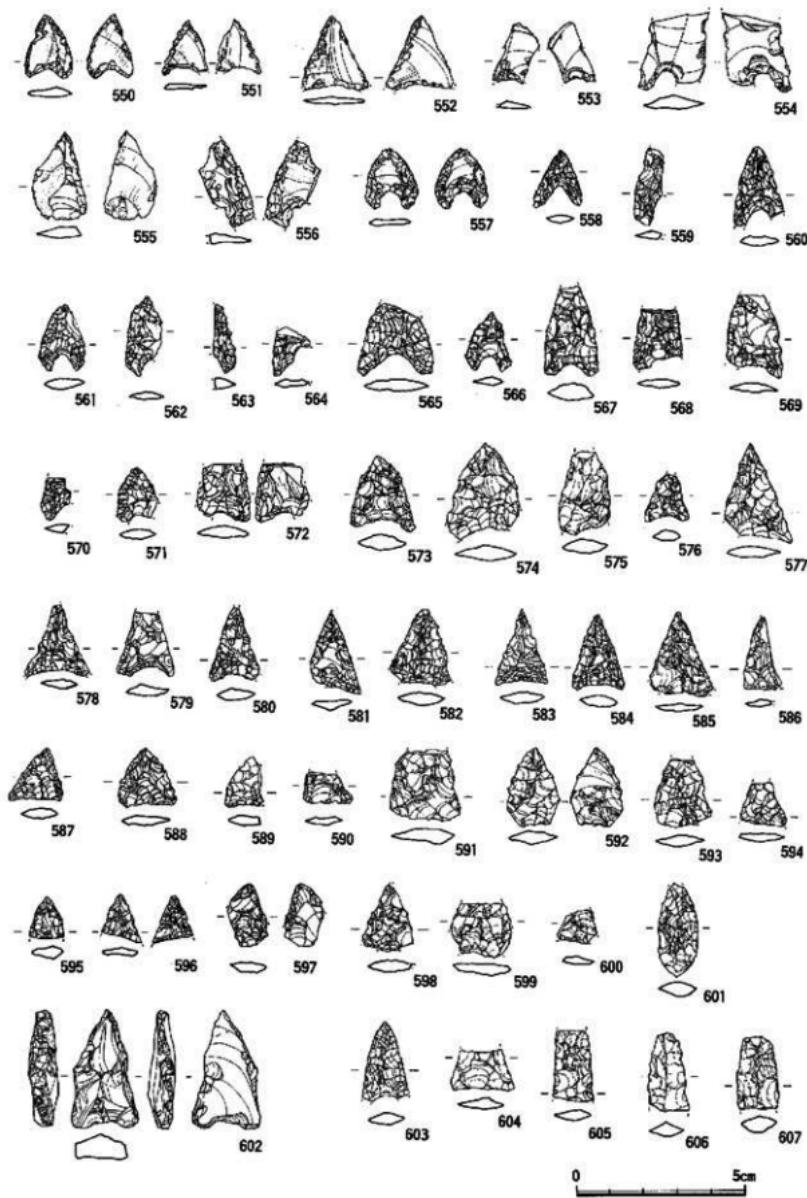


Fig.36 出土石器尖頭図 1 (2 / 3)

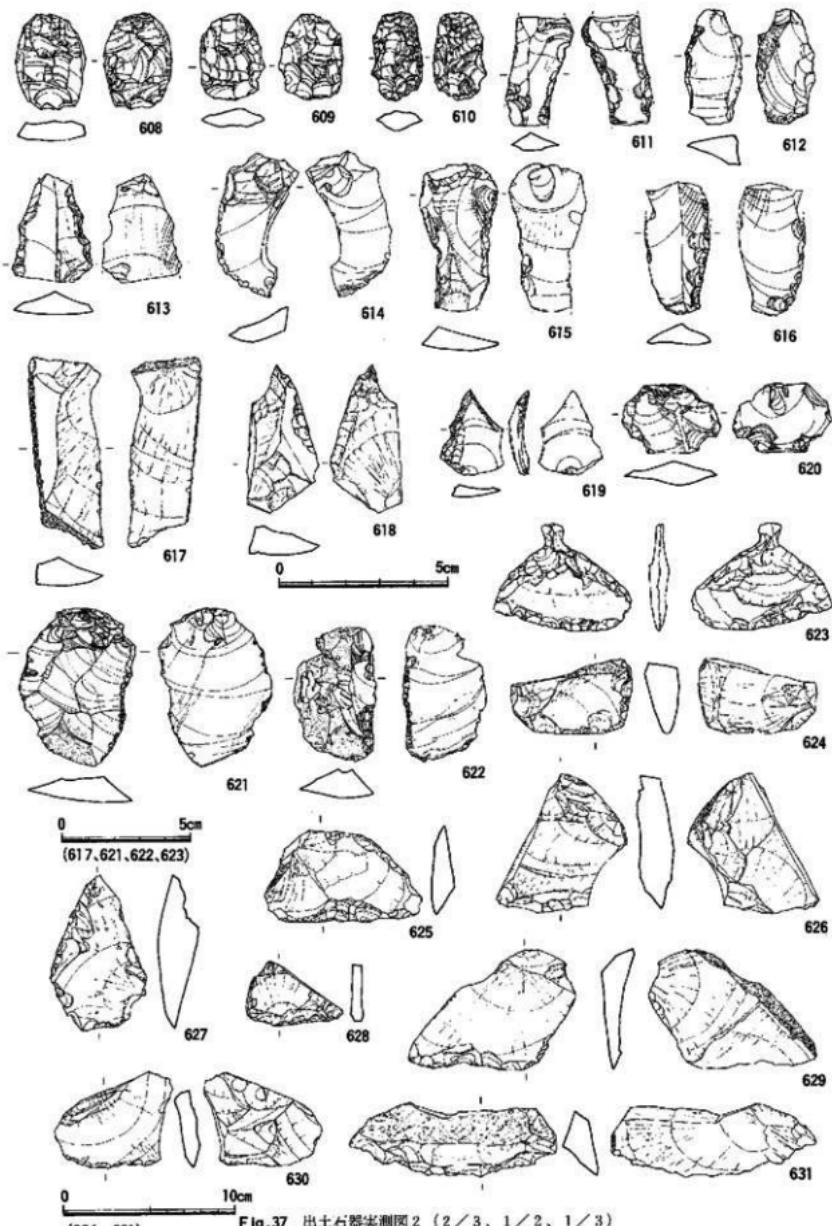


Fig.37 出土石器尖端图 2 (2/3, 1/2, 1/3)

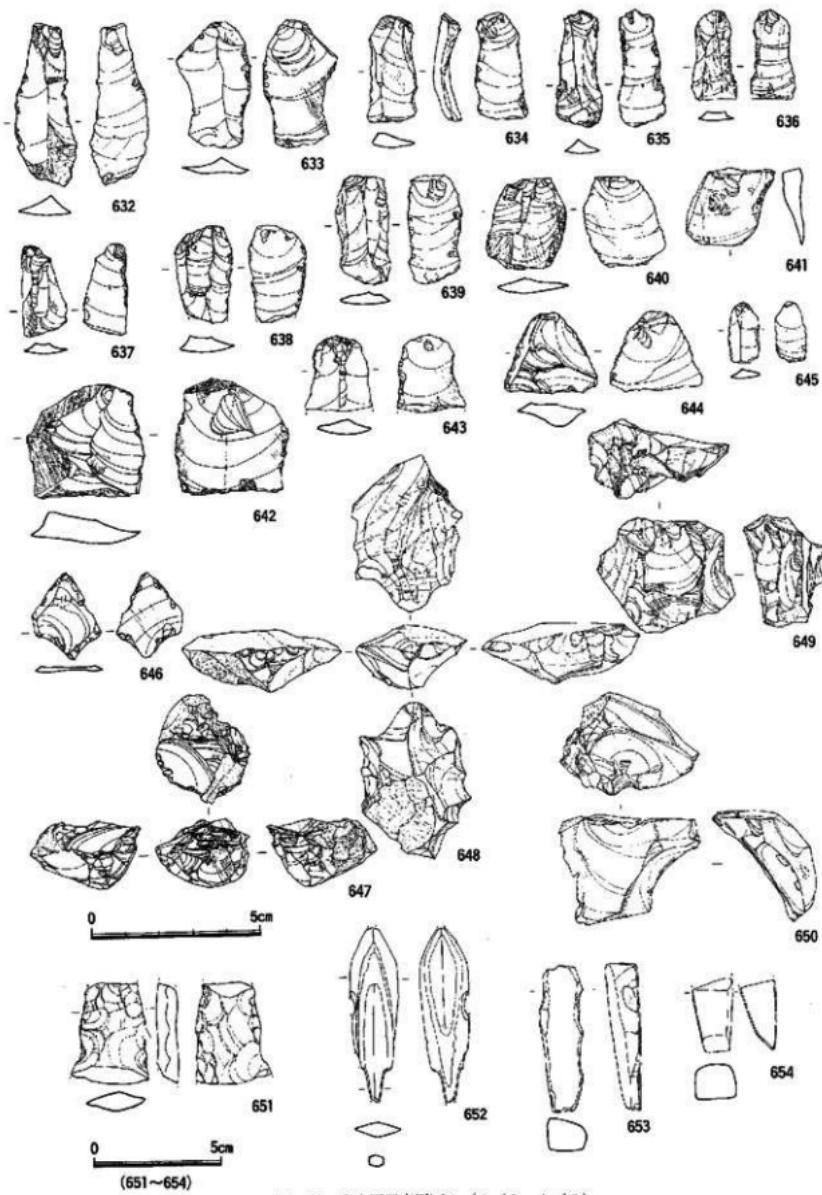


Fig.38 出土石器尖端圖3 (2/3, 1/2)

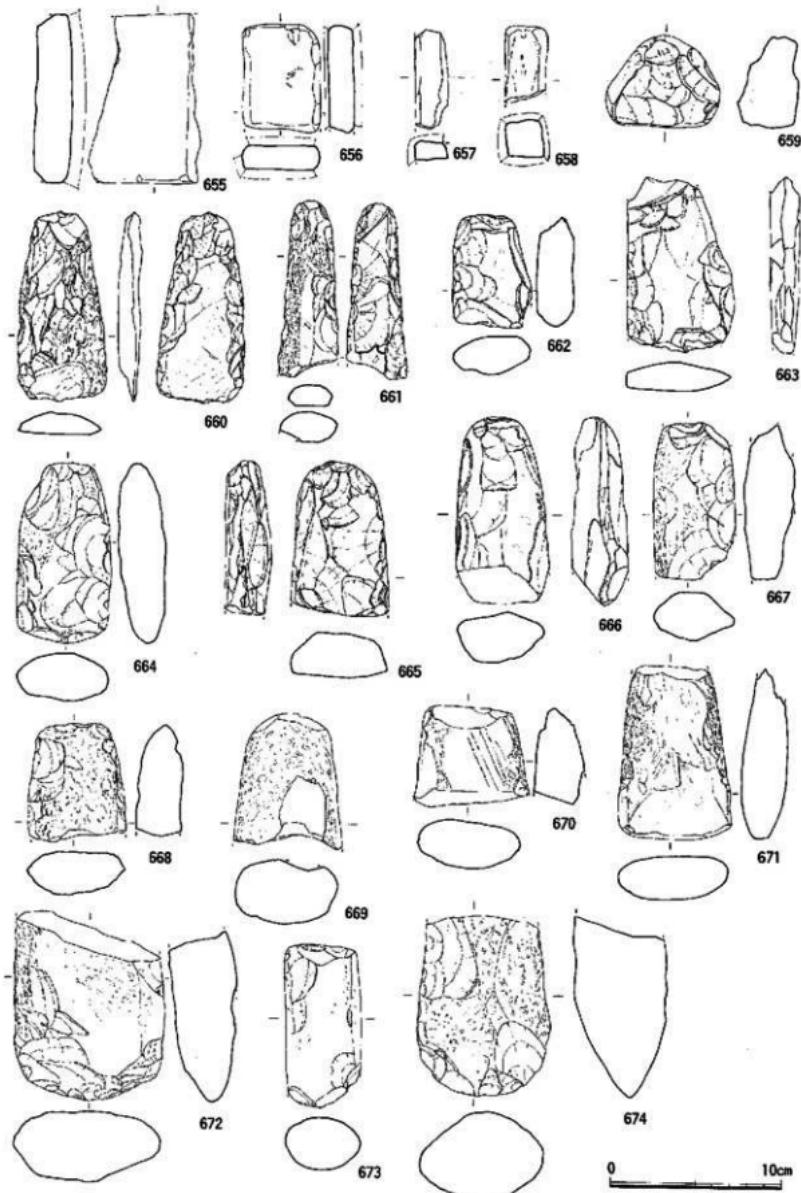


Fig.39 出土石器実測図 4 (1/3)

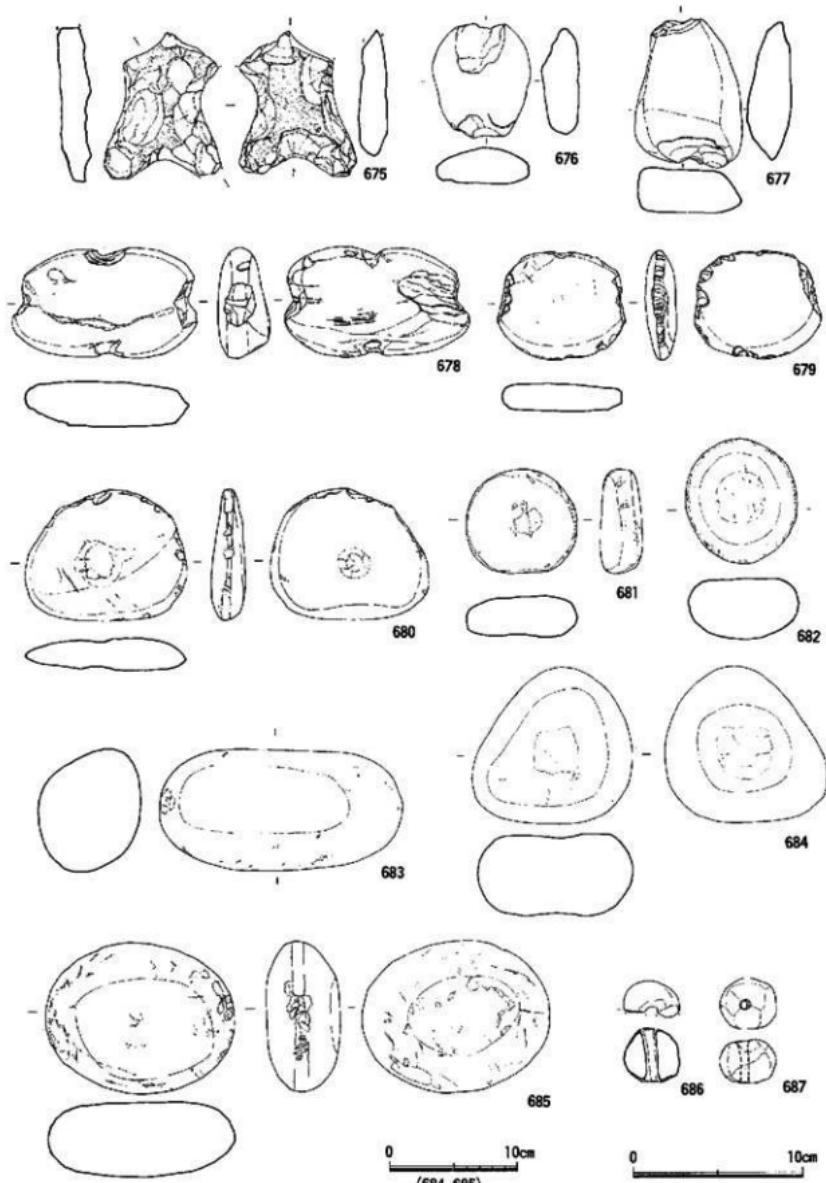


Fig. 40 出土石器実測図 5 (1/3, 1/4)

表1. 出土石器

出土地点	出土品種	重さ(g)	出土地点	出土品種	重さ(g)	出土地点	出土品種	重さ(g)
550	I-1区4層上	0.7	556	SP1407	0.3	642	SP2181	11.6
551	SP2626	0.1	557	SP2181	0.9	643	SK107	2.2
552	SK107	0.1	558	SP2181	1.0	644	SP2180	2.6
553	SK12529	0.5	559	I-2区	1.3	645	006	1.0
554	I-1区4層上	1.7	600	SK028	0.4	646	SP2177	1.0
555	I-1区4層下	0.9	602	I区	1.0	647	I区	1.3
556	I-1区4層下	0.8	603	I-2区	3.2	648	II区	10.0
557	I-1区4層	0.8	605	SGC01	1.1	649	II区	24.2
558	I-1区	0.3	606	I区	0.7	650	II区	19.8
559	I-1区	0.3	607	I-2区	1.3	651	横山田	11.8
560	I-1区4層下	1.0	608	I-2区	1.4	652	横山田	7.0
561	SK001	1.7	609	I-2区4層下	1.7	653	I-1区2層	10.0
562	SK001	0.6	610	横山田	4.7	654	II区	11.0
563	SP177	0.3	611	SP1115	2.9	655	I-1区	109.8
564	II区	0.3	612	I-2区4層下	2.3	656	I-1区	91.0
565	006	0.5	613	横山田	4.9	657	SP2177	30.4
566	横山田	2.0	614	I区	3.5	658	SP1232	40.3
567	SK1251	2.1	615	横山田	7.5	659	SK001	190.3
568	横山田	1.4	616	横山田	6.0	660	I区	100.0
570	II区	0.5	617	SP1082	4.0	661	I-2区	10.0
571	SK1253	1.8	618	SP1082	1.1	662	I区	109.2
572	II区	1.2	619	SGC01	9.0	663	SP2277	161.0
573	横山田	1.5	620	SP1181	1.7	664	I-2区	52.0
574	SP2177上	2.0	621	SP2350	3.7	665	SP2774	145.0
575	I区	1.9	622	SP2357	2.7	666	SP2774	282.1
576	II区	0.6	623	SP2181	17.0	667	II区	25.0
577	SK0065	1.4	624	I-2区4層下	14.0	668	SK0218	178.0
579	SK0065	1.9	625	I区	7.5	669	I-1区	272.3
580	I-2区4層	1.8	626	I区	67.4	670	I区	17.0
581	SK0061	0.8	627	I区	12.0	671	SP2180	291.0
582	SGC01	1.5	628	I-2区	24.0	672	横山田	613.0
583	SK1260	1.5	629	I-2区	20.1	673	横山田	291.0
584	横山田	0.7	630	I区	108.0	674	I-2区	462.6
585	II区	0.9	631	I区	40.0	675	I-2区	118.0
586	II区	0.6	632	SP1190	109.0	676	横山田	111.0
587	SP2187	0.9	633	SP2180	4.7	677	横山田	209.1
588	SP2589	0.9	634	SK001	8.7	678	I区	308.3
589	SK142	0.5	635	SK145	2.4	679	II区	308.3
590	SK142	0.3	636	SK145	1.9	680	SP2180	238.5
591	SP2746	1.0	637	SP2545	1.2	681	SP2214	164.0
592	横山田	1.3	638	SGC08	1.2	682	SP2180	266.3
593	SK141	1.4	639	SK003	2.9	683	SP1232	95.2
594	0061	0.5	640	SP1232	2.0	684	SP1232	190.0
595	II区	0.4	641	SP1232	3.0	685	SP2180	162.6

の砥石である。655と657は灰色の日の細かな石材で一部が黒変し、焼成によると思われる。656は緑灰岩を呈す。658は灰色で柱状を呈し4面を使用する。659は玄武岩製の敲打具で岡の下面に敲打痕が残るが、細かな剥離がみられ、石斧等の木製品の転用と考えられる。660は頁岩、661は細粒砂岩製の石斧で敲打段階の製作途中で横方向からの打撃で片面が割ける。661は石劍の木製品とも考えられる。662から669は玄武岩製のやや小型の石斧である。663が偏平である以外は横断面がやや偏平の柱状で丸みがある。いずれも敲打を行う。670、671は細粒砂岩製の石斧である。671は先端部付近を両面とも研磨し、刀部を欠き敲打痕が残る。672と674は大型の玄武岩製の石斧で剥離、敲打により刃部を作り出す。673も玄武岩製の石斧で丸みを帯びた柱状の胴部部分である。以上石斧は敲打、研磨を行っているがいずれも未完成品である。675は安山岩製の十字形もしくは人形の石器である。表面に自然面を残す。676から679は石錐である676、677は1対を打ち欠き、順に花崗岩、玄武岩の自然縞を使用する。678、679は滑石製で678は2対に抉りを入れ、679は1対がやや顎著だが全側面を浅く打ち欠く。680、681、684は礫の中央が敲打もしくは摩擦でくぼみ、側面の一部には敲打痕がある。順に滑石、玄武岩、花崗岩である。682、683、685は前2つが花崗岩、685が玄武岩の自然縞で一部に敲打痕が残り、682は摩擦による平坦面がある。敲打具および磨り石として使用されたものと考えられる。684は花崗岩製の自然縞の両面が敲打、摩擦によりくぼむ。この他にII区のSP2517からは8cm大の、塊状、板状の黒曜石が各1点出土した。埋納した可能性がある。

IV. 終わりに

周船寺遺跡13次調査について簡単に触れてきた。以下、若干の付け加えをしておきたい。

縄文時代については、今回も埋甕以外の遺構をほとんど検出することができなかった。埋甕は本体の形態、調査地点出土の土器からして晩期のものである。遺物は西平式からあるが、摩耗が著しく混じり混みと考える。晩期前半も少量みられるが黒川式併行期を主体とする。単純期の刻日突帯文土器は若干出土しているが小破片であり、弥生前期との連続性を考えると周囲に中心地があると考えられる。

表2 石器組成

	石器	海藻石 (海藻山)	スケレーパー	U-Pb (玄武岩)	鉛 (玄武岩)	砂岩 (玄武岩)	石器 (玄武岩)	黒曜石 (玄武岩)	小石	真文土器	繩文石器 支文化	打制石 片打石	磨石	CIA-B	鍛石	瓦砾	小計	合計				
玄武岩 (玄武岩)	2	1	4	28	371	4	6	1	566			2					2	549				
安山岩 (安山岩)	3	1	6	26	227	16	41	12	2296	25	2	4	1	2	5	1	30					
火山渣 (火山渣)	10	20	20	22	22	10	20	10	200	10	10	10	10	10	10	10	10	3101				
火山灰 (火山灰)	20	5	10	10	22	75	114	10	21	20	2	4	2	2	2	2	2	205				
火山灰 (火山灰)	10	10	10	10	10	36	30	20	10	10	10	10	10	10	10	10	10	4257				
骨質	59	5	24	11	10	22	4	35	4721	81	36	21	56	23	13	5	3	8	2	6	5	130
骨質	5	10	10	10	10	22	10	20	200	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	5697

* 特に安山岩の石錐・石核、黒曜石のつまみ型石器、穿孔貝、石槍が各々立ある。

* 繩文遺跡には包含層005を含む。005以外のビットについては弥生遺跡に含めた。時期不明は包含層、遺構検出時出土のものを一括とする。

弥生時代はほぼ前期に限られ、中期以降の遺物は4.5次調査地付近のものであろう。住居跡は良好な遺物の出土が少なく、細かな時期比定は困難だが、板付IIa式併行期に収まるものと考える。土壤も同様で、SK001、035が若干古くなり得る。また、SC029、031、SK101、139等、SD1023、1350は北西のほぼ同じ方向を向いており、同時存在と集落内のある程度の規格性を示唆する可能性があろう。SC021を中心とした住居跡で、玄武岩の碎片、粉が多く出土し、敲打具、石斧の未完成欠損品が出上した。製品がない事を考えると持ち出された可能性が高い。玄武岩の石材も多く出土しているが、石斧の素材になる大きさではない。いずれにしても、この場所で板付IIa式段階に石斧を中心とした石器製作が行われている。また、これまで周船寺遺跡南部で前期の遺構が密集した所ではなく、今回の調査地は1次調査地点の住居跡と合わせて前期集落の中心地の一画にあたる。

遺物は良好な一括資料を得ることができなかった。土器の器種構成は検討していないが、I区を中心として高杯の出土が多い事は特筆できよう。特にI-1区の包含層に多く、18点以上を数える。石器類の数については表2に示した。縄文の遺構と弥生の遺構に分けたが、弥生期の遺構からも縄文土器が多く出土していることを考えると両者それぞれの資料を抽出することは困難である。その中で縄文期のものは混じりが少ないとされる。刺片、碎片の分類は、目的素材刺片に直接かかわるものと刺片とし、多分に主観があり、分類の変動が大きい。今後、良好な資料の綿密な分類がなされるまでの大きな試みとしておきたい。刺片石器については黒曜石、安山岩を数えた。その数は圧倒的に黒曜石が多いが、総数中の石器の割合は安山岩が高い。安山岩は石核、素材となる刺片が少なく、製品が持ち込まれた事も考えておく必要がある。黒曜石についてはこれまで十郎川遺跡等で指摘されてきたように、刺片、碎片の量に比して製品が少なく石鎚が主たる定型石器である。表2で縄文期の刺片の比率は他2者と比べて高いが、この差の有意性の有無については周辺の良好な資料との比較を重ねる必要がある。また、黒曜石は不純物の多少、質感で4、5種類の違いがある。その中で姫島産と考えられる淡灰色のものが2点のみ出土している。自然遺物としては、住居跡の土壤の水洗作業で微量ながら骨片が出土した。今回は同定出来なかったが、今後もできる限り土壤の水洗を行う必要がある。

最後に2頁で触れた放射性炭素年代測定結果について抜粋、編集して掲載する。

測定試料：木材 前処理・調整：酸-アルカリ-酸洗浄、ベンゼン合成 測定法： β -線計測法

(液体シンチレーションカウンタ)

^{14}C 年代(年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代(年BP)	曆年代(西暦)	測定No.(Beta-)
4450±70	-27.0	4200±70	交点: Cal BC 3030	
			1σ : Cal BC3310~3230, Cal BC3110~2920	148325
			2σ : Cal BC3350~2900	

測定は、Beta Analytic Inc. (Florida, U.S.A.)において行われた。Beta-は同社の測定No.を意味する。

図版 1



(1) I - 3 区全景 (南から)



(2) II - 1 区 (北東から)



(1) I - 1 区下層 (北から)



(5) ST004・013・014 (北西から)



(2) I - 2 区 (南から)



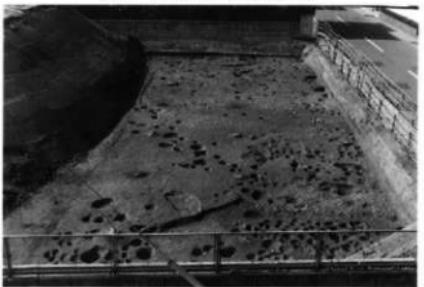
(6) ST004 (北から)



(3) I - 3 区全景 (南東から)



(7) ST013 (東から)



(4) II - 2 区全景 (東から)



(8) ST014 (東から)

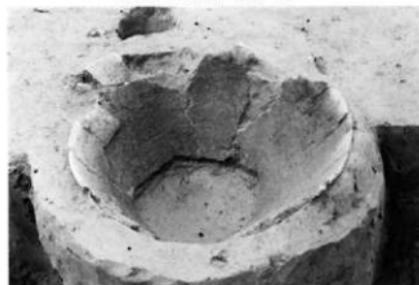
図版 3



(1) ST115断面（西から）



(5) ST138（南から）



(2) ST114（南から）



(6) SK017（北から）



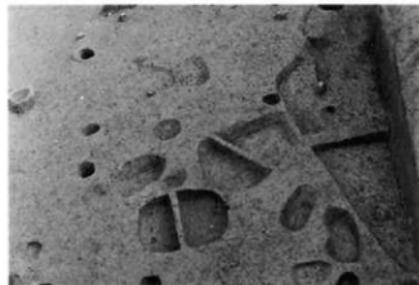
(3) ST130（北から）



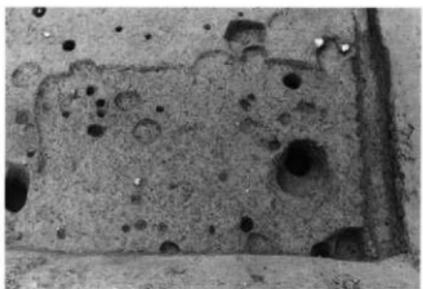
(7) SK037（西から）



(4) ST131（東から）



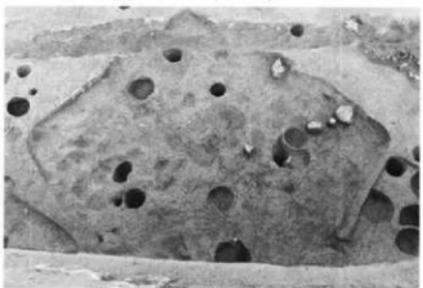
(8) I - 3 区下層



(1)SC002 (西から)



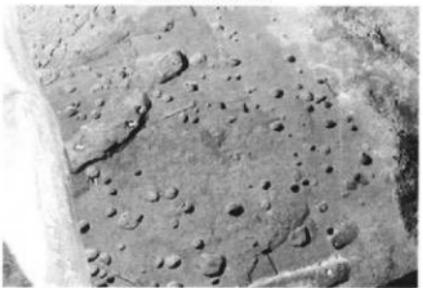
(5)SC021土器出土状況 (南から)



(2)SC031 (西から)



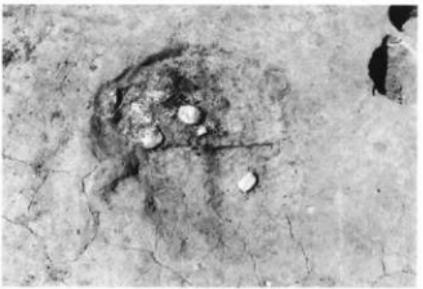
(6)SC027 (南から)



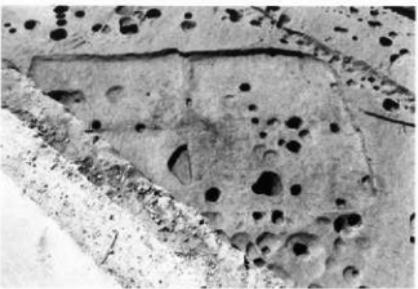
(3)SC021 (南から)



(7)SC028 (北西から)

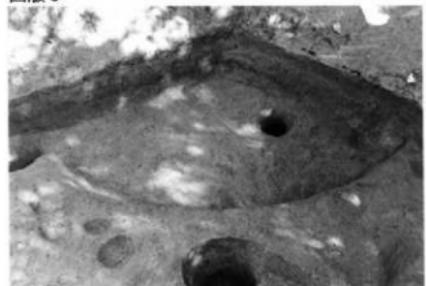


(4)SC021鉢 (東から)

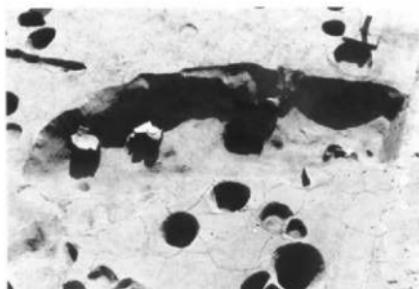


(8)SC029 (北東から)

図版 5



(1)SC152 (西から)



(5)SK032 (北から)



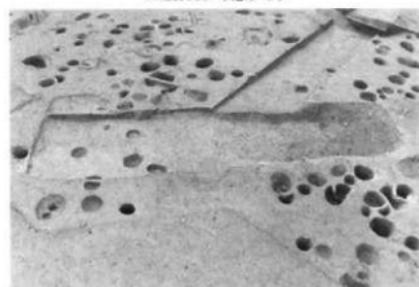
(2)SC153 (南から)



(6)SK035 (北から)



(3)SK001 (南東から)



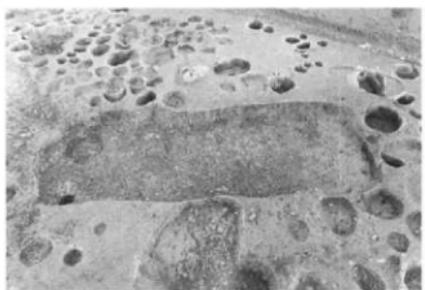
(7)SK101 (北東から)



(4)SK018 (北から)



(8)SK102 (南から)



(1)SK141 (西から)



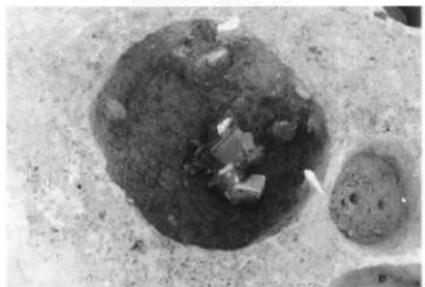
(5)SX020 (北から)



(2)SK139 (北西から)



(6) I - 2 区耕作痕? (南から)



(3)SK2715 (南から)



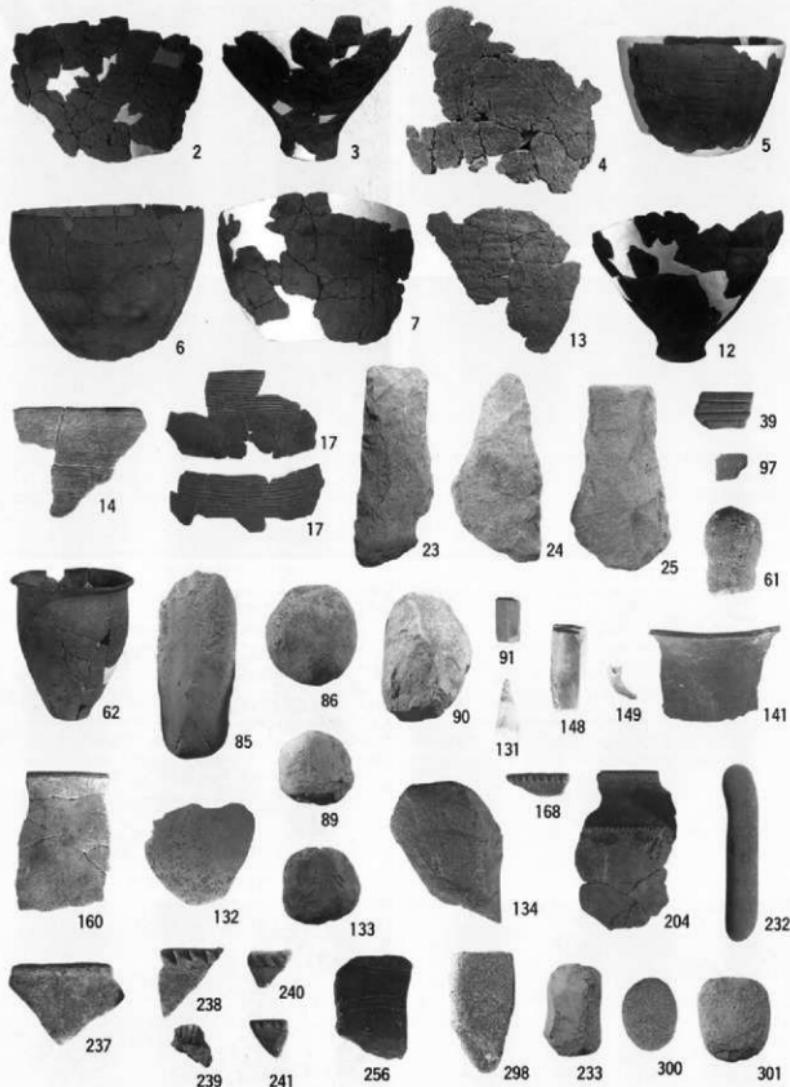
(7) II - 2 区ピット群耕作痕? (北から)



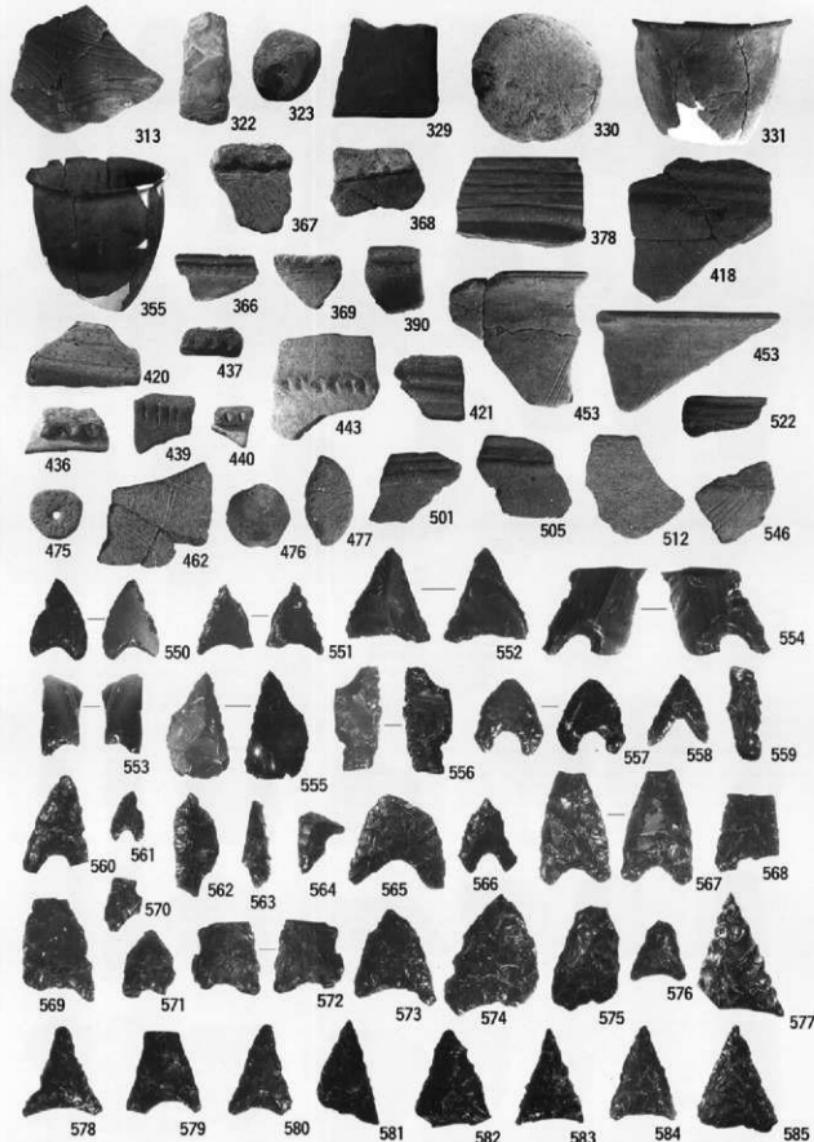
(4)SD022 (南から)



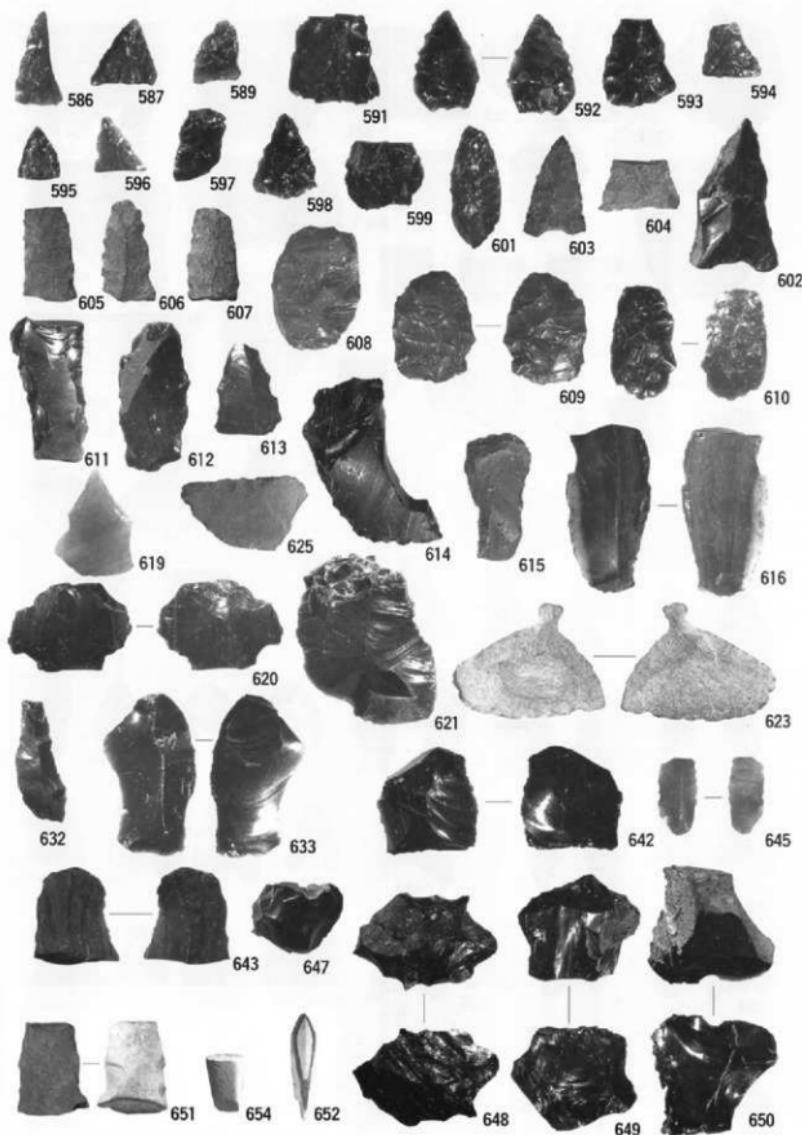
(8) II 区深掘土層



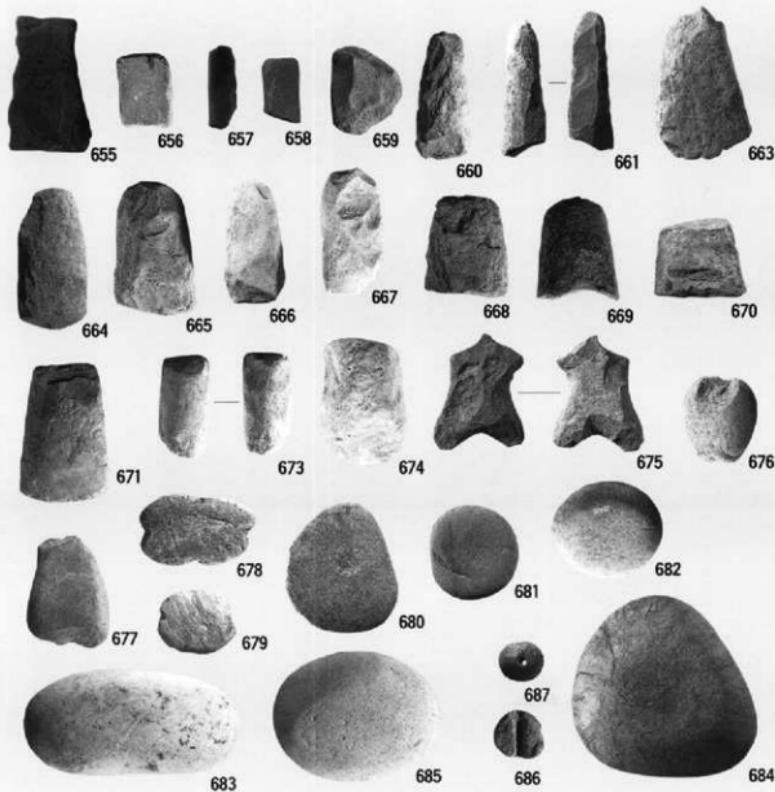
出土遺物(1)



出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)

周船寺遺跡群4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第692集

2001年(平成13年) 3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 株式会社ナガシマ
福岡市博多区豊1丁目9-18
(092) 482-7734